

[24]韓国研究センター年報

<https://hdl.handle.net/2324/7218211>

出版情報：韓国研究センター年報. 24, 2024-03-21. Research Center for Korean Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



ミニ特集

「ポスト 1965 年体制」
研究プロジェクト
講演集

【研究事業：共同研究プロジェクト研究会】

「『ポスト1965年体制』 研究」 共同研究会

「88ソウルオリンピック以降の韓国映画・ドラマの変化」

- ・日 時：10月14日（土）14：30～17：30
- ・会 場：博多駅バスターミナルの貸ホール（第1ホール）
- ・講演者：成川彩

□ プログラム

第1部 講演：成川彩（東国大学日本研究所 研究員）
「88 ソウルオリンピック以降の韓国映画・ドラマの変化」
第2部 鼎談・質疑応答
成川彩（東国大学日本研究所 研究員）
出水薫（韓国研究センター 副センター長）
緒方義広（福岡大学 人文学部東アジア地域言語学科 准教授）

「私が暮らした韓国の30年、疾走する社会で転がる石になれ」

- ・日 時：2024年1月20日（土）14：30～17：00
- ・会 場：博多アーバンスクエア（第1会議室）
- ・講演者：伊東順子

□ プログラム

第1部 講演：伊東順子（作家・翻訳家）
「私が暮らした韓国の30年、疾走する社会で転がる石になれ」
第2部 鼎談・質疑応答
伊東順子（作家・翻訳家）
出水薫（韓国研究センター 副センター長）
緒方義広（福岡大学 人文学部東アジア地域言語学科 准教授）

「88ソウルオリンピック以降の韓国映画・ドラマの変化」

第1部 講演：成川彩*

司会（出水薫・韓国研究センター 副センター長）：私は司会を担当します九州大学の出水と申します。よろしくお願いいたします。

開催にあたり、共催団体の韓国研究センターと九州韓国研究者フォーラムの2団体からごあいさつをいただきたいと思います。まず、九州大学韓国研究センター長の元兼先生、よろしくお願いいたします。

元兼（韓国研究センター長）：皆さん、こんにちは。本日のフォーラムに共催しております九州大学の韓国研究センターのセンター長として一言ごあいさつを申し上げます。韓国研究センターでは、2023年度から、新たな研究事業として、「『世界史』の中の韓国－その構造変動に関する総合的研究」という受託研究を始めています。今日はその一環として、共同研究プロジェクトである「『ポスト1965年体制』研究」という枠の中で講演会を開催する次第です。

すでに、キックオフで神戸大学の木村幹先生や東京大学の木宮先生、そして翻訳家の斎藤真理子さん等魅力ある講師陣をこれまで招聘できて、今回も成川彩先生に来ていただきました。実は、今日、私が理事をやっている学会のイベントが東京で開かれるんですけれども、それをサボって、こちらのほうがおもしろそうだなと思って、あいさつをするつもりはなかったんですけれども、こちらに来ました。

慌てていまその本屋で成川先生の本を買ってきて、予習を始めたところでした。このテーマは、縦軸としての歴史だけではなくて、「世界史の中の韓国」ということで、横軸というか空間論もやっていますので、例えば、木宮先生や木村先生が日韓関係の対等性の変化、今日のテーマでいうと、韓国ドラマに対する日本の消費の仕方もかなり変わってきているのではないかということ、この間の映像技術などいろいろな意味で韓国ドラマの発展はすごく進んでいると思います。最初はどうかと思っていましたが、マクチャンドラマという現実離れたドロドロの復讐劇も見始めると結構ハマってしまいます。その中で、問題関心の違いとかこだわりの違いなど、普段なかなか気づかない違いがドラマの中にも描かれています。ドラマを見ても韓国語は一向に上達していませんが、韓国の文化やその背景などを伺い知ることができると思っています。

まだ読み始めたばかりで、「ラーメンを食べる」意味を初めて知りました。韓国に行ってそのことを問われることはないと思いますけれども。今日は、鼎談もありますから、ぜひ福岡でこのテーマを語り合うことの意味も考えながら第一部、第二部とも楽しみにしています。どうぞよろしくお願いいたします。

司会：続きまして、九州韓国研究者フォーラムの事務局を担当しておられます、福岡女子大学の木村先生、よろしくお願いいたします。

木村（福岡女子大学教授）：ただいまご紹介いただきました、九州韓国研究者フォーラムで事務局を担当しております木村と申します。代表は出水先生ですが、出水先生が司会をされるということですので、私のほ

* 2006年神戸大学法学部卒業。2008年大阪大学大学院通訳翻訳専修コースを卒業した後、2017年まで朝日新聞記者として活動。韓国の東国大学映画映像学科修士課程を経て2023年同大学日本学科博士課程修了。現在、東国大学日本研究所の研究員。日韓の様々なメディアで執筆活動をしている。著書に『어디에 있든 나는 나답게（どこにいても、私は私らしく）』（2008、생각의 창）、『現地発 韓国映画・ドラマのなぜ?』（2023、筑摩書房）がある。

うから代わりに挨拶させていただきます。私たちのフォーラムは、コロナ禍の2020年に結成されました。当初は人文社会科学の研究者中心にオンラインで開催しておりました。しかし、私たち研究者が韓国へ行けな
いなか、ソウル・釜山駐在の特派員の記者の方々が帰国されてくるようになり、韓国の現地の生の声をお伝
えいただくという趣旨で、メディアの方々も交えて見識を深めて参りました。

先ほど、元兼センター長からご紹介ありましたように、関西からは木村幹先生、関東からは木宮先生と、
九州だけでなく各地の著名な先生方を福岡にお呼びしております。その延長線上で、今回大変ありがたいこ
とに成川さんにお越しいただきました。私どもフォーラムのメンバーも大変うれしく思っております。

また、私どもフォーラムは、ソウルにある「アジアの平和と歴史研究所」と合同で毎年研究会を開催して
おります。九州だけでなくソウルともネットワークをつなぎ、出水先生を中心にこれからもますます活動の
幅を広げていきたいと思っておりますので、引き続きご支援のほど、よろしくお願いいたします。成川さん、
きょうはよろしくお願いいたします。

司会：ありがとうございます。

私も成川さんの著書を拝読しました。今年の5月に出版されたばかりの『現地発 韓国映画・ドラマのな
ぜ?』という筑摩書房からのものです。今日もおみえですが、西南学院大学の田村先生に、この本が発売さ
れる直前にKBC シネマでのトークイベントと西南学院大学で講演を企画していただきました。その際に私
も参加し、そのあと、この本を読みました。私たちの研究のテーマとも重なりますし、研究者だけではなく
広く一般の方にも公開して行うのが適切だろうということで今回の企画となりました。

それでは、さっそく、1時間程度ですが、成川さんにお話をお願いしたいと思います。成川さん、よろし
くお願いいたします。

成川：こんにちは。成川彩です。よろしくお願いいたします。本の内容をご紹介していただきましたが、実
は、きょう準備してきた内容が本の内容とだいぶ違うので、どうしようかと思っています。

いま、ご紹介していただきましたが、西南学院大学で、本の発売直前に、本の内容にかなり近いお話をさ
せていただいたので、同じ福岡なので違う話のほうがいいかなと思って違う内容にしました。準備しながら
「ちょっとしまったな」と思ったのは、私はドラマに関して2000年代以降は結構見っていますが、80年代、90
年代はそれほど見ていないので、ドラマについては調べてみましたが、変化とははっきり言えるほどのものは
あまりないです。映画に関しては専門でやっていて、「検閲」というキーワードがあるので、わかりやすく
話せる部分がありますが、ドラマについてはおまけのようにになっているという点、最初にお断りしておきま
す。

最初、90年代以降の変化というお題をいただいていたのですが、88年としたのは、ソウルオリンピックをきっ
かけに映画がすごく変わったというわけではなく、87年の6月民主抗争で韓国の民主化が進み、それまでは
表現の自由がかなり制限されていたけれども、民主化によって変わっていくところが一番大きいだろうと思っ
て88年にしました。

自己紹介を少しさせていただきます。2008年から9年ほど朝日新聞に勤め、基本的に、文化を中心に担当
しました。2017年に退社して、韓国の東国大学に留学して、韓国映画を中心に研究しながらフリーライター
として活動しています。福岡は、朝日新聞を辞めるまではあまり来たことがなかったのですが、辞めてから
最初の連載の機会をいただいたのが朝日新聞福岡版だったというご縁がありまして、それ以降、KBC シネ
マや西南学院大学に呼んでいただいて、ほぼ毎年1回は来ています。今年は2回目ですが、去年の12月末に
チャン・リュル監督が福岡に来た時に通訳を担当したので、かなりの頻度で来ている感じがします。

ソウルオリンピックの前後の状況を韓国国内と世界的な視点とに分けて考えてみると、先ほど申し上げたとおり、80年代の幕開けは、1979年に朴正熙大統領が暗殺されて、80年代に入ってすぐに光州事件がありました。世界的に韓国のイメージが非常に悪い状態だった中での1988年のソウルオリンピックということで、国外の視線を気にせざるを得ない時代だったと思います。なので、オリンピックと民主化は関係なくもないと思っています。

『タクシー運転手』(2017)という映画にもなりましたが、光州事件は当時、光州以外の韓国内では知られていなかったのですが、そういうことがあったということ、隠されていたということに学生たちを中心に気づき始めて、どんどん民主化運動が大きくなっていくという流れがありました。それが抑えきれなくなったのが1987年だったと思います。そして、1988年にはオリンピックも控えているということで、大統領直接選挙制を認めました。

結局、韓国の民主化運動の中心にあったのは、国民が直接、大統領を選ぶということだったと考えると、ここで一つの区切りがあったと言えると思います。『1987、ある闘いの真実』(2017)はまさに6月民主抗争を描いている映画なので、よかったら見てください。

映画に関連した動きとしては、これをきっかけに検閲が緩和されます。その前から緩和が始まっていましたが、大きなきっかけになりました。加えて、80年代の終わりは、冷戦が終わりに向かっていく時期でもありました。韓国では国際化の時代を迎えていました。南北に分断している国なので、冷戦の間はかなり激しく対立関係にあったわけですが、それが少し緩み、共産圏との付き合い方が変わってくる。1990年にソ連と国交正常化し、1992年に中国と国交正常化します。

映画に関してもソ連や中国の映画が韓国に入ってくると、「なぜ、日本だけ入ってこないんだ」という議論が起こります。隣の国なのに、日本大衆文化開放は1998年です。90年代はその矛盾が見えてきます。日本だけ制限するのはおかしいのではないかという議論がだんだん起きて、やっと1998年に開放されるという動きがありました。

これは『1987、ある闘いの真実』のポスターにもなっていますが、映画の中でも最後のほうに実際の映像として出てくるものです。これだけの人たちがソウルの中心に集まったので、大統領直接選挙制を認めざるを得なくなったという大きな出来事だったと思います。



CJ エンターテインメント提供

少し話が本筋から外れますが、私の研究している対象がこの辺りなので言うと、1965年に日韓の国交が正常化しましたが、普通は国交が正常化すると、文化の交流が活発になりますが、先ほど申し上げたとおり、韓国側では日本の大衆文化開放が1998年まで公式にはできませんでした。日本側では止めているわけではなく、日本では韓国映画を上映してもいいけれども、関心が低かったということもありますし、双方の交流はないということもあったと思います。1987年以前は、私が数えた限りでは、3～4本くらい韓国映画が日本で劇場公開されましたが、ほとんどされていません。上映会や映画祭のようなかたちの単発での上映はたくさんありますが、本格的に劇場公開されるのは1988年からです。88年からは毎年かなりの本数が公開されていくようになります。

ソウルオリンピックを機に日本で韓国語ブームもありましたし、韓国文化に対する関心が高まってきました。劇場公開はすごくお金がかかるので、ある程度観客が入るという見込みがないとできないし、続けられないということもあるので、それだけ関心が高まってきたということです。

もう一つは、1988年から韓国映画配給を始めたのがアジア映画社です。兵庫県の朴炳陽（パク・ピョンヤン）さんという在日韓国人の方が代表をされていた映画会社です。ここのスタッフだった方にもインタビューをして聞きました。88年からかなり積極的に韓国映画を公開していましたが、ほぼずっと赤字だったらしいです。ほかの事業で穴埋めしながら続けていたそうです。お金になるからやったわけではなく、オリンピックを機に関心が高まったので、祖国の文化を日本に紹介したいということだったようです。公開作品のタイトルを見ても、観客がたくさん入るような内容でなく、芸術性や作品性で選んだ感じがします。そういう人たちがいて、韓流ブームへの下地をつくっていった時期だったと思います。

1988年に韓国映画が劇場公開されたことは当時の新聞にも出ていました。これまでは上映会形式だったけれどもという書き方でしたが、これはオリンピック効果ではないと書いている記事もありました。韓国映画のレベルがそれだけ上がってきたからだということです。確かに、80年代後半は、イム・グォンテク監督の『シバジ』（1987）でカン・スヨンがベネチア国際映画祭の主演女優賞をとったり、イム・グォンテク監督作が多かったですけれども、韓国映画が国際映画祭で受賞し始める時期でもありました。福岡はゆかりの地ですけれども、アジアフォーカス・福岡国際映画祭ディレクターだった映画評論家の佐藤忠男さんが積極的に韓国映画を紹介しました。特に、イム・グォンテク監督についての本も出して、そういうことも影響していると思います。

変化というからには、民主化以前の状況がどうだったのかについて触れておきます。一つは、南北や朝鮮戦争を描く時には、基本的には、反共映画でなければいけない。反共産主義をテーマにつくる映画。共産主義に幻滅を感じさせて、韓国の優越性を認識させる目的のプロパガンダ映画です。それが軍事政権下で奨励されました。例えば、韓国の代表的な映画賞に大鐘（テジョン）賞があります。そこで1966年から優秀反共映画賞というものが設けられました。しかし、反共映画はあまり面白くないです。わかりきっているというか単純な善悪が描かれているものを見たくないの、私はあまり見ないです。韓国の人たちも同じだと思います。見て面白くなければ観客は入らないので、映画として商業的に成功するのはすごく難しいし、つくり手もばからしくてやっていられないだろうと思います。

検閲があったので、いろいろな方法で曖昧にして検閲を乗り越えて表現しようとする試みがたくさんあって、そういう意味で表現が深まっていった部分があったと思います。しかし、反共映画はあまりつくられなくなって、民主化とともに80年代後半にはこの賞もなくなりました。

例えば、1955年の『ピアゴル』は、パルチザン（共産ゲリラ）の蛮行が描かれた代表的な反共映画ですが、共産主義に対する批判性が欠如しているという指摘もあって、当局が「パルチザンの英雄化」とみられる場面をいくつか削除しました。

きょうは研究者の皆さんが多いので、あまり説明する必要はないと思いますが、今年5月に『オマージュ』という映画でKBCシネマに呼んでいただいた時に、『オマージュ』の話をする中で検閲の話をしたら、「検閲って何ですか」という質問を受けました。よく考えたら、日本ではあまりイメージがわからないのかもしれませんが、韓国では当たり前のことで、わりと最近まで検閲があって、事前に映画について「ここは修正しろ」とか「削除しろ」とか言って干渉するわけです。それに従わないと上映できません。そういうかたちで干渉していました。日本も昔はそういう時期があって、日本のやり方を韓国がそのまま軍事政権下で引き継いだということです。場面の削除などをやっていました。

では、90年代前半の映画やドラマはどんなものがあるでしょうか。結構たくさんあるので、これだけではないですけれども、特徴的、代表的なものをいくつか紹介します。

『南部軍』（1990）は韓国映画史においてすごく画期的な映画だといえます。最近、チョン・ジョン監督が映画監督デビュー40周年を迎えて、回顧展がありました。そこで私は『南部軍』を初めてスクリーンで見ました。何が画期的だったかというと、パルチザンを描きながら反共映画ではなかった点です。90年代だからできたことです。ヒューマニズム映画としてつくられています。1987年以前では難しかったことです。チョン・ジョン監督は40周年ですが、チョン・ジョン監督のように80年代から活動していた監督で、いまでも撮り続けている監督はほかにほとんどいません。断絶があるというか、90年代後半から活躍し始めた監督は結構いまでも現役で活躍していますが、チョン・ジョン監督は80年代に撮り始めて、いまでも新しい作品をつくっていて、若い感覚があるというか、時代に合う作品を生み出している貴重な監督の一人です。

もう一つは、同じく1990年の映画『追われし者の挽歌』（パク・クァンス監督）です。韓国の公的機関の映像資料院で名作ブルーレイ化を行っていて、ブルーレイを年に4本くらい出しています。私は日本語字幕の監修を担当していて、担当した作品は最低4回くらいは見るので、結構印象に残ります。『追われし者の挽歌』もそれで見て、すごくいい映画で、こういう映画があったのかと感動しました。ナント三大陸映画祭で審査員賞とシム・ヘジンが女優主演賞をとって、評価がとても高かったようです。ムン・ソングンが主演で、学生運動で指名手配となって炭鉱村に逃げ込んだ若者が主人公です。戦々恐々としながら、炭鉱村も炭鉱村で労働運動をやっていて、運動で挫折していく人の話だといえはわかりやすいでしょうか。

ドラマはあまり見ないので言いにくいですが、『第3共和国』というドラマが1993年に放送されました。これは、朴正熙政権の前半を描いたドラマです。1993年の時点で、朴正熙大統領は歴史的に評価できない段階だったので、画期的だったといわれています。

日本人も結構見ているのが『砂時計』です。1995年のドラマです。これは伝説的な作品で、最高視聴率が64.5%です。砂時計を韓国語でモレシゲと言いますが、モレシゲ（砂時計）キガシゲ（帰宅時計）といわれたくらいです。キガシゲとは帰宅時計です。『砂時計』が始まる時間にはみんな家に帰るといわれたくらい国民的なドラマです。これはラブストーリーではありますが、光州事件をはじめ70年代から80年代の現代史が背景になっています。そういうドラマが90年代に登場してきます。

コリアン・ニューウェーブと言われる映画の特徴としては、80年代後半から表現の自由がある程度緩和されてきて、南北分断、左右対立、経済格差など政治・社会・歴史的問題を正面から扱う映画が出てきたということで、コリアン・ニューウェーブといわれています。いまご紹介したようなパク・クァンス監督やチョン・ジョン監督の作品がこれにあたるといわれています。先ほど申し上げたアジア映画社や佐藤忠男さんが熱心に紹介したのもコリアン・ニューウェーブの監督たちでした。

1987年から表現の自由が一気に緩和されるわけではなくて、やはり闘いがあります。勝ち取っていく過程があって、2000年代に入るまで検閲は実質続いていました。その一つが、80年代後半くらいから出てきた独立映画です。80～90年代の独立映画はそもそも表現の自由拡張のための闘争として始まりました。いろいろ

な映画集団が出てきますが、その中でもチャンサンコンメという集団の映画を例に挙げると、1989年に『五月 夢の国』という初めて光州事件を描いた映画をつくっています。これが映画法の事前審議規定違反で文化広報部に告発されます。事前審議というのは要するに検閲のことなので、検閲を受けずに上映したということで告発されます。この映画は『五月 夢の国』という日本語のタイトルが付いていて、90年代に日本でも上映されています。ご存じですか。

聴衆 A：見ました。

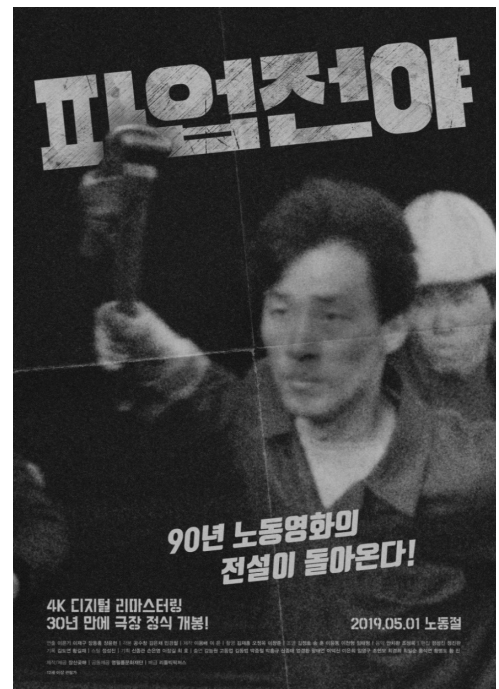
成川：すごい。私は1988年以降に日本で公開された映画のリストを作っていて、結構知っている映画が多いですけれども、知らない映画が時々出てきて、『五月 夢の国』って何かと思って見たら、光州事件の映画でした。日本は韓国の民主化運動に対する関心がそれなりに高かったので、ある意味マイナーな映画も上映されたんですね。

聴衆 B：福岡で上映会がありました。

成川：福岡は上映会だったんですね。公開作品に入っていたので、日本のどこかでは劇場公開したようです。同じくチャンサンコンメがつくった映画で、伝説的な独立映画の作品として語られ続けているのが『ストライキ前夜』という1990年の映画です。工場労働者の労働運動を描いた映画で、2019年に再公開されています。2019年は韓国映画100周年の年でしたので、100周年記念に伝説の映画を再公開したようです。私も見ましたが、どこがそこまで伝説的なのかなと思ったのですが、検察側がストライキを扇動したと主張して上映阻止しようとして、かなり激しくやり合ったようです。ヘリコプターが飛んだり。『ストライキ前夜』の映画をめぐる争いがかなり注目されたため伝説化していったということのようです。

今回、釜山映画祭に行った時に、この映画の延長線上だなと思ったことがあります。私がいまいろいろな仕事をしている中に、『JSA』（2000）などのヒット作をつくっているミョン・フィルムという映画会社があって、私は日本事業パートナーということで一緒に仕事をさせてもらっています。そのミョン・フィルムが今年の釜山映画祭に出していた映画の中で、『やるべきこと』という映画がありました。造船会社の人事担当が主人公で、リストラする側の話で、親しい上司のクビを切らなければいけないという内容です。私は日本事業パートナーなので日本に売り込まなくてはならないんですけれども、正直、地味だな、造船会社のリストラかと思いました。すごいいい映画ですが、地味な印象でした。ミョン・フィルムの代表は夫婦なんですけれども、夫のイ・ウンさんはチャンサンコンメのメンバーで、『五月 夢の国』と『ストライキ前夜』の2作品の共同監督の一人です。『やるべきこと』という映画を見て、やっていることが昔とあまり変わっていないというか、いまま90年代にやっていたことの延長線上にあるという感じがしました。

ミョン・フィルムについて言うと、韓国映画の歴史がそのまま詰まっているとも言えます。ミョン・フィ



ミョン・フィルム提供

ルムは、シム・ジェミョンさんというとても有名な女性映画プロデューサーがいて、彼女の名前から「ミョン」を会社名にしたのだと思います。チャンサンコンメのイ・ウンさんとシム・ジェミョンさんが夫婦ですが、シムさんは映画の企画から入った人です。『JSA』もそうですが、すごく企画のうまい人で、かなりたくさん映画をヒットさせています。企画専門の妻と映画運動に携わってきた夫、二つの色合いを持つ作品を作り続けているのが、ミョン・フィルムです。いまでもラブストーリーの映画もつくっているし、金大中のドキュメンタリーもつくっています。来年1月が金大中学生誕100周年だそうで、それに合わせて公開する予定です。

映画人の運動を経て検閲がなくなっていますが、決定的だったのは、憲法裁判所が違憲決定を出したことです。チャンサンコンメの『五月 夢の国』と『閉ざされた校門を開けて』という2本の映画の制作側が、事前審議を受けずに上映したことで告発されたんですが、その規定自体が違憲だと訴えて、憲法裁判所に違憲審査を提起しました。1996年、それに対して憲法裁判所は全員一致で公演倫理委員会の映画事前審議は違憲という決定を下しました。検閲する機関が公演倫理委員会という所ですが、そこの事前審議、検閲は違憲だという決定です。その決定の趣旨は、いかなる映画も行政府によって公開自体が禁止されてはならないというものでした。

その後すぐに公演倫理委員会は解体されますが、1997年に削除や修正ではない等級分類業務のみを行う機関を設置しました。これはどういうことかという、何歳から見てもいいとか、誰でも見ていいとかいう等級を分類するということです。結局、等級分類を保留するというのは、何かしないと公開できない。要するに、修正の圧力をかけているということです。

中国についてはあまり詳しくないので、この場で言っているのかわからないですけども、チャン・リュル監督が同じようなことを言っていました。今年の釜山映画祭で、チャン・リュル監督が中国で撮った中国映画『白塔の光』が上映されました。チャン・リュル監督は中国の朝鮮族自治州の出身で、韓国語も話せるし、韓国映画もたくさん撮っています。ご存じの方も多いと思いますが、福岡でも『福岡』(2020)『柳川』(2021)の2本を撮っています。昨年福岡で上映する時に通訳としてずっと一緒にいたので、今回、釜山で上映された『白塔の光』の話もしました。その時点では発表前でしたが、ベルリン映画祭に呼ばれているけれども、実は検閲の結果が出ていないという話でした。結果が出ていないまま海外の映画祭に行くと、ペナルティーがあるらしいです。どこを直せというものではなく、検閲の結果を出さないという圧力のかけ方をするという話をしていました。その話を聞いて、韓国でも同じようなことをかつてやっていたんだと思いました。

2001年に改めて、憲法裁判所が、等級分類保留は違憲だという決定を下して、2002年に等級分類規定がなくなり、これによって長い検閲の歴史が終わりました。厳密には完全になくなったわけではないのですが、実質、ほぼなくなったと言えます。

ここまで表現の自由に関することをお話ししましたが、ここからは、韓国の90年代のもう一つの大きな特徴についてお話しします。『パラサイト』、『愛の不時着』、『イカゲーム』辺りから、日本のメディアから「なぜ韓国映画・ドラマがこれほど発展したのか」とよく聞かれるようになりました。明確には答えられないままでしたが、考えてみると、90年代が飛躍の下地をつくった時期だったと思います。それまで表現の自由が制限されていたということと、経済がまだ発展段階だったので、90年代にやっと大企業が映画にお金を出し始めるようになりました。80年代までの監督はかなり厳しかったと思います。表現の自由と資本がなくて、やりたいことができなかったと思います。

変化があったのが90年代です。大きな特徴の一つとしてCJがあります。もともとは第一製糖という砂糖の会社で、いまでも食品会社として知られていますが、CJがエンタメ関連では韓国でいま一番大きな会社です。CJが90年代に行った功績というか功罪というか、悪い面もあると思いますが、一つは米国への進出です。

かなり画期的なことでした。1995年に、スティーブン・スピルバーグ監督らが設立したドリームワークスに3億ドルの投資をしました。当時のCJの規模からすると、3億ドルはものすごく高額だったようで、反対も大きかったのですが、3億ドルの投資をして、米国市場への足掛かりをつくっていきました。

なぜそれが画期的だったかという点、いまになってみると、2020年に『パラサイト』が作品賞を含めてアカデミー四冠を達成しました。授賞式でイ・ミギョン CJ グループ副会長がスピーチしたので、あれは誰だという話になりました。イ・ミギョンが反対を押し切って3億ドルを投資した張本人です。米国でアカデミー賞をとれるほどのネットワークを築いていた。もちろん、作品の力もありますが、ネットワークを築いていたということが2020年に初めて注目されました。

もう一方で、CJは1998年に、11スクリーンを備えた韓国初のシネコン「CGVカンビョン」をオープンして、その年の観客数が350万人を記録しました。それくらいのパワーがありました。その後、ロッテシネマやメガボックスなどのシネコンが増えました。これは、いまの韓国映画界の影の部分でもあります。シネコンもスティーブン・スピルバーグがイ・ミギョンに勧めたといわれていますが、昨今、問題となっているのは、スクリーン独占問題です。日本でもある程度あるのかもしれませんが、私の感覚では韓国のほうが深刻だと思います。例えば、CJやロッテでは、製作・配給・劇場すべてを持っているので独占しやすいです。大きな映画が公開されると、そればかりになってしまって、ほかの映画が見られない状況がよくあります。いつも問題提起されるけれども、なかなか解決しません。独占状態だと多様性が奪われます。いろいろな映画をつくりたい、見たいけれども選択肢がないという状態につながった面もあります。

90年代に資本が入ってきて、企画映画が始まります。それまではあまりマーケティングやトレンドを考えずに映画をつくっていたようですが、90年代からは資本が入ってきて、投資をするということはトレンドに敏感にならざるを得ないです。日本の製作委員会方式が鈍感だと思うのは、その違いだと思っています。観客が入ることを期待して投資するわけですから、韓国の映画のつくり方は、90年代に投資会社が投資をして予算規模が大きくなっていくわけです。最初に注目されたのは、カン・ウソク監督のカン・ウソクプロダクションで、『ツー・コップス』（1993）、『女房殺し』（1994）という映画が連続ヒットして、企画映画が増えています。

先ほど申し上げたようなミョン・フィルムのシム・ジェミョンさんやサイダースのチャ・スンジェさんが活躍するようになってきます。チャ・スンジェさんは私が通っていた東国大学の教授です。チャ・スンジェさんはポン・ジュノ監督の『殺人の追憶』（2003）などを製作していて、サイダースは2000年代半ばまでトップの制作会社でした。一番大きいのはポン・ジュノの発掘です。ポン・ジュノは発掘されなくても頭角を現したと思いますが、チャ・スンジェさんが2000年代前半の韓国映画界を引っ張った部分はかなり大きかったと思います。ミョン・フィルムも『JSA』を2000年につくっていますが、名プロデューサーといわれるような人たちが活躍するようになってきました。

極めつけがカン・ジェギョ監督の『シュリ』でした。1999年に公開された映画です。90年代に大企業が映画に投資するようになって、『シュリ』はサムスン映像事業団が出資して、純製作費だけで27億ウォンで、この当時としてはすごく大規模でした。韓国の人たちが誇りに感じたのは、『タイタニック』を上回るヒットだったということです。直前に『タイタニック』がものすごくヒットしていました。韓国映画史を勉強しているとわかるのは、ハリウッドに韓国映画は負けて当然みたいな感じがずっとあって、それで、スクリーンクォーター制で韓国映画のスクリーンを確保することをやってきましたが、だんだんそういうことをやる必要がなくなっていく。以前は、韓国映画を見ない韓国人が多かったようで、映画館もハリウッド映画のほうが観客が入るからハリウッド映画を上映したいけれども、決まりで韓国映画も上映しないといけなからやるみたいな感じでした。『シュリ』は、韓国映画がハリウッド映画を超えるヒットを生むという例

をつくった作品です。『シュリ』以降、韓国映画が日本を含め海外に売れるようになっていきます。

90年代で言及しておきたいのが、金大中大統領です。金大中大統領の文化政策が2000年代の韓国映画や映像産業の発展につながったと評価されています。「支援はするが、干渉はしない」、「文化産業は21世紀の基幹産業」ということをはっきり言っていました。その前の時代は、支援はあまりしないのに干渉ばかりしている時代があったわけです。1998年に就任する前の1997年に、IMF 経済危機があったのも結構大きかったです。そこから脱却する一つの政策として文化産業を育てることを掲げました。文化予算を増やしたり、文化産業振興基本法を制定したりして、2000年代の映画・ドラマ産業の成長の土台を築きました。

一方で、韓国映画の話ではないかもしれませんが、金大中大統領政権下で行ったのが日本大衆文化開放です。これもよく聞かれるのが、なぜ日本の大衆文化を韓国で開放したのに韓流ブームになったのか。逆ではないかとよく聞かれます。はっきりはわからないけれども、私の考えをお話したいと思います。

まず、1998年に小渕恵三首相と金大中大統領の間で「日韓共同宣言－21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ」を宣言しました。その一環として、段階的に日本の大衆文化が開放されました。それまでは、映画についていうと、日本映画は正式に劇場公開できなかったもので、映画祭や文化院などで見るしかありませんでした。しかし、実際には海賊版のビデオで多く見られていました。正式に劇場公開された日本映画の第一号は、北野武監督の『HANA-BI』（1998）でしたが、期待していたほど観客は入らなかったそうです。もうすでに海賊版で見ていたから、という分析もあります。

最近知って、そうかと思ったことは、第一号は『HANA-BI』だといわれていますが、実は、日本大衆文化開放によって公開された第一号の映画は、パク・チョルス監督の『家族シネマ』（1998）だそうです。『家族シネマ』は韓国の製作会社がつくっているのも韓国映画という分類になりますが、韓国映画がなぜ上映できなかったのかというと、日本の俳優が出ているからです。開放前は、日本映画がだめだけでなく、日本の俳優が出ている韓国映画も上映できませんでした。日本大衆文化開放によって、日本の俳優が出ている韓国映画も公開できるようになって、『家族シネマ』が『HANA-BI』よりも先に公開されたので、実は『家族シネマ』が第一号だったという話でした。

いろいろ調べてわかったのですが、日本の大衆文化の制限もあまりはっきりしたものではなくて、1965年に国交正常化したあとに、当然のように日本の大きな映画会社は韓国マーケットに日本映画が進出できると思い、実はいろいろな試みがありました。日韓合作の試みもあったし、韓国映画に日本の俳優が出たこともありましたが、ことごとく上映できませんでした。韓国でつくった映画はいいけれども上映禁止となると、ものすごい損害です。日本の俳優が出ていたらだめとか、日韓合作はだめとかいう規定があるというよりも、事実上禁止されるのでつくらなくなることの繰り返しだったようです。それが1998年まで続いたということです。

日韓合作映画をつくってもいいけれども、韓国では上映できません。韓国で上映できないなら、つくる意味がないのでつくらないわけです。逆に、日本映画に韓国の俳優が出るのは自由なので、例えばアン・ソンギさんが小栗康平監督の『眠る男』（1996）に出ていました。韓国の俳優が日本の映画に出ることはあっても、その逆が難しかったということです。

日韓合作映画は2000年代にたくさん出てきました。例えば、『KT』（2002）は、日韓ワールドカップに合わせてつくられた日韓合作映画です。2002年6月がワールドカップでしたが、5月に日韓同時公開されました。しかし、運が悪かったのが、『KT』は1973年の金大中拉致事件を素材にしている映画ですが、ちょうど2002年5月くらいに、金大中大統領が息子の不祥事で人気落ちていた時期で、映画の宣伝がしづらかったようです。韓国側では2週間ほどで打ち切りになって、あまり観客が入らなかったそうです。

2002年当時、金大中拉致事件は韓国ではあまり評価がはっきりしていなかったというか、まだタブー視さ

れていました。日本ではそこまでタブーではなかったけれども、映画化することはかなり勇気がいることでした。そこに挑んだけれども、成功といえるほどの結果ではありませんでした。

これはシネカノンの李鳳宇（リ・ボンウ）さんがプロデュースした映画で、キャッチコピーの「国を愛する心が人を殺す」は、李さんの発案でした。李さんは私の研究対象でもあるのですが、済州島四・三事件でご両親が済州島から日本へ来たという背景を持っていて、韓国の軍事政権に対する批判意識が非常に強く、金大中拉致事件に対する思いはとても大きいようです。

一方で、『愛の黙示録』という映画もありましたが、これは韓国で公開できなかった例として挙げました。日本では1997年に公開されましたが、韓国では1998年から日本大衆文化が開放されるので、その前の時期で、日本で韓国に関して政治家の失言などもあって、上映しようとしたけれどもできなかったそうです。この映画は、キム・スヨン監督の演出で、石田えりとキル・ヨンウという俳優が主演しています。木浦の共生園という所で、朝鮮戦争孤児など3000人の孤児を育て上げた田内千鶴子さんという高知県出身の女性を描いた日韓合作映画です。最初から日韓友好がテーマで、つくる過程も作品の内容もそういう方向性があったのですが、先ほど申し上げたとおり、90年代に入ってずっと日本大衆文化開放という動きがあったので、それに合わせてつくったのだろーと思います。大衆文化開放が思ったよりも遅れたので、結局、韓国では劇場公開はできなかった。けれども、韓国を訪れた小渕首相が、金大中大統領に『愛の黙示録』は両国の友好に寄与する作品だと伝えたという新聞には出ていました。これがきっかけだったのか、韓国の国会で上映会があったという記事もありました。

これと対照的な話をする、同じくワールドカップ日韓共催を機にドラマでも合作がありました。『フレンズ』、覚えている人も多いと思います。MBCとTBSが共同制作して、2002年2月に日韓で放送されました。このドラマで主演のウォンビンがすごく有名になって、韓流四天王といわれました。日本側ではあまり知られていないかもしれませんが、韓国側では日本語がそのまま放送されたことが、問題になりました。映画に関しては大衆文化開放で結構早い段階でほぼ全面開放に向かっていくんですけど、ドラマに関してはストップしていました。

もともとは2002年のワールドカップまでに日本大衆文化を全面開放することになっていましたが、2001年の歴史教科書問題を機に中断していました。韓国の外交カードの一つだったんです。文化開放を一旦中断するという動きがあって、ドラマに関しては完全に開放されていなかったということです。日本語がそのまま放送されてしまって、段階的に開放している意味がないじゃないかということで、開放の中心人物だった池明観（チ・ミョングァン）さんが辞めたり、結構大事になりました。そういうことを経て、結局、2004年に第4次開放があって、やっと日韓合作ドラマが地上波で放送できるようになりました。

大衆文化開放も結構ややこしくて、いろいろな段階で、いろいろなストップがかかっています。基本的に、日本文化は韓国で制限の対象であって、外交カードになっていたと感じました。

これまで話したことを整理すると、ソウルオリンピックが開かれた1988年前後は、韓国では民主化が進んで、同時に、世界では冷戦が終結に向かった時期でした。その結果、映画・ドラマではそれまであまり描けなかった軍事政権や民主化運動、労働運動などが描かれるようになりました。

日本では、ソウルオリンピックを機に韓国文化への関心が高まって、80年代にはNHKのハングル講座が始まったりしました。それと共に、1988年以降、毎年、韓国映画が劇場公開されるようになっていきました。

もう少し付け加えると、日本で最初にヒットしたといわれている韓国映画は、イム・グォンテク監督の『風の丘を越えて』です。これは1994年の映画ですが、アジア映画社の朴炳陽さんとシネカノンの李鳳宇さんの違いだなと思うんですけど、朴さんはわりと純粋に「いい映画があるよ」と紹介していたなという感じがします。李さんは目の付け所が「ヒットするかどうか」。「ヒットさせる」というところに意識があっただ

ろうと思います。

朴さんがアジア映画社をつくったのと同じ時期に、李さんもシネカノンを立ち上げましたが、最初は韓国映画以外のヨーロッパの作品を中心に配給していて、たぶん最初に配給した韓国映画が『風の丘を越えて』だったと思います。李さんは当時、朝鮮籍だったので、韓国に行くためには臨時パスポートが必要でしたが、それでも韓国へ行って『風の丘を越えて』を買ってきました。その後、行き来するために朝鮮籍がネックになるので、韓国籍を取得します。李さんが『シュリ』、『JSA』、『殺人の追憶』など代表的な韓国映画を日本で配給して、韓流ブームの一つの流れをつくりました。

映画の検閲は民主化によって緩和されたけれども、すぐにはなくならず、独立映画を通して表現の自由拡張の闘争の結果、憲法裁判所の決定を経て2002年に事実上なくなりました。かなり最近のことです。

2003年に『殺人の追憶』や『オールド・ボーイ』（パク・チャヌク監督）などが出てきます。これらの映画が検閲にかかるかどうか微妙ですけれども、抑えられていた表現の自由が花開いていくというような部分がすごくあったのだらうという気がします。

90年代は大企業が映画に投資するようになって、企画映画や名プロデューサーが登場するようになり、その極めつけが、1999年の『シュリ』で、サムスンが出資した大作でした。

さらに金大中大統領の文化政策が2000年代の映画・ドラマ産業の発展に寄与した部分が大きいです。いまちょうど金大中ドキュメンタリーの編集段階のものを見ているので、感じるものがあって、この言い方はあまり相応しくないかもしれませんが、ある評論家は、「金大中は朴正熙がつくった」と言っています。弾圧の対象として押さえつけて、押さえつけて民主化の象徴になっていくみたいな部分があったからでしょうか。

日本文化に関して言うと、すごくアイロニーですが、韓国では朴正熙大統領は親日のレッテルを貼られる面があって、経済的なことや米国の圧力もあって日韓外交正常化を進めるけれども、文化開放ができないのは、植民地などの歴史に対する韓国の国民的な感情もありましたが、朴正熙大統領は日本の文化開放には踏み切りにくい立場でした。逆に、金大中大統領はその心配はまったくない。金大中大統領こそ日本大衆文化開放をやりやすい立場だったと思いました。

1998年から段階的に日本大衆文化開放が始まって、申し上げたとおり、日韓合作も韓国で上映できるし、日本の俳優が韓国映画にも出られるようになりました。例えば、今年大ヒットした『犯罪都市3』という映画に青木崇高や國村隼などの日本の俳優が出ています。

日本の俳優が出ることで日本でも注目されやすいし、ニュースなったり、公開されたら見に行く人が多かったので、両方のマーケットを考えた時に、日本の俳優や韓国の俳優を出すことは一つの手法となります。そういうことが可能になったということです。こういうことが、韓流ブームにつながる一つのきっかけになったのではないかと考えています。合作ができるようになったことと、日韓の俳優がお互いの映画に出るようになったことで露出が増えるということはあったらうと思います。

2003年に日本で韓国ドラマ『冬のソナタ』の放送をきっかけに韓流ブームとなりました。日本大衆文化開放が始まったのが1998年10月で、今年は、日本大衆文化開放25周年で、韓流20周年という記念の年だそうです。

ありがとうございました。

司会：ありがとうございました。

第2部 鼎談・質疑応答

成川彩（東国大学日本研究所 研究員）

出水薫（韓国研究センター 副センター長）

緒方義広（福岡大学 人文学部東アジア地域言語学科 准教授）

出水：それでは、再開したいと思います。まず、この3人で少しやり取りをして、そのあと、皆さんも交えて全体で気軽にやり取りができればよいかなと考えています。きょうの企画の趣旨は、冒頭にお二人の主催者の方からご紹介がありました。韓国研究センターが今年度から3年間の総合的な研究を行いますが、その中の一部門として「ポスト1965年体制」と呼ばれるプロジェクトグループがあります。私と緒方さんは、そのメンバーになっています。

「ポスト1965年体制」についてですが、1965年に日韓基本条約が締結されました。その時の日韓の関係やそれぞれの社会から、現状はものすごく変化しました。日韓基本条約自体は何も変更されていませんけれども、日韓基本条約に基づいた日韓関係などは大きく変わりました。そのような変化を総合的に捉えていく時に、韓国社会の変化や韓国社会へ向けての日本側からのまなざしの変化などは、当然、視野に入れなければいけません。

その際、映画やドラマなどK〇〇ブームが現在の日本側にあるので、こういった企画を通して、韓国側の社会の変化を、映像作品を通して見るとか、受容の仕方の中で日韓関係の変化を考えてみることを今後も定期的に行っていきたいと思っています。実はいま準備段階ですが、来年の1月には、伊東順子さんをお招きして同様の観点で企画を行う予定です。

まず、自己紹介を順番にしたいと思います。私は、出水と申します。九州大学の法学部で政治学を担当しています。また、韓国研究センターで副センター長を担当しています。

3人とも自己紹介で触れていただきたいのは、初めて韓国に行ったのはいつか。私が一番短いですが、お二人は長く韓国にお住まいですので、どのくらいの期間、どこにいたのかをお話したいです。

私は、1985年、つまり民主化以前、学生時代に初めて韓国に行きました。仁川空港はなかったので、金浦空港に向かって帰る時、新村（シンチョン）を通るバスの中で、右側に延世大学の門があり、そこに学生が怒涛のようについて、道をはさんでバスの反対側に戦闘警察が怒涛のようにいる中を通して金浦空港へ行った経験が初めての韓国です。そして、1994年から1997年まで釜山の日本総領事館で専門調査員をしました。緒方さんも専門調査員をされていたと思いますが、ちょうどリアルタイムで『砂時計（モレシゲ）』を見ました。あるいは、『モレシゲ』以前に、ハン・ソッキュなどが出ていた『ソウル（ソウレタル）』というタルトンネを描いたドラマがありました。おもしろいことに、『ソウレタル』の中で親友同士だったハン・ソッキュとチェ・ミンシクが、『シュリ』では南北に分かれて敵対するので、そういうことを意識してキャスティングしたのかなと考えたりしました。

緒方：福岡大学の緒方と申します。よろしくお願いします。私が初めて韓国に行ったのは、1997年です。大学2年生の時に、大学生活がつまらないなと思った時に、たまたま学内の交換留学の案内があって、ソウルの崇実大学に1カ月語学研修というかたちで行ったのが初めてでした。私が行った時も仁川空港はまだなくて、金浦空港だった時でした。なぜその時に関心を持ったかという、私の出身が神奈川県（川崎市）で、高校時代に周りに在日の友人がいました。

川崎のふれあい館という在日コリアンの児童を預かるような施設があって、当時すでに在日だけでなく社会的マイノリティー、ほかの国の子どもさん、いわゆる多文化の子どもたち、あるいは障がい者の子どもたちが通っている所でした。そこにかかわっている在日の家族が友人にいて、そういうところから関心がありました。

また、その当時、日本で戦後補償問題が一番盛り上がった時期だったので、自分の通っていた高校に慰安婦の被害女性が証言に来るとか、いま思うとすごい経験をして、それで朝鮮半島の問題に関心を持ちつつ普通の大学生を過ごしていましたが、やっぱりつまらないと思った時に、韓国に行く機会があって、1カ月行っただけが最初でした。その時は、カナダラマバサから始めました。いまから思えば、ほとんどできていないですが、異文化交流みたいなことをして楽しかった記憶があります。

そのあと、また普通に大学生活を終えて、就職して、3年間、外務省傘下のJICAという所の仕事を受けているJICEという財団で働いていました。3年間、サラリーマンをやって、また、つまらないなと思っていたところに、留学をしようと思った時に、特別に英語が得意なわけでもないし、と思って思い付いたのが韓国でした。韓国に留学したのが、2003年の夏からです。ここまで長くなるとは思っていませんでしたが、そこから19年、昨年まで韓国に住んでいました。

先ほどご紹介くださったように、私も専門調査員ということで大使館で2年間働くこともありましたが、先ほど、教科書問題の話がありましたが、2005年の教科書運動の時には、市民運動のインターンというかたちで市民運動にかかわったこともあります。大使館勤務が終わったあと、ソウルにある弘益大学で日本語の先生の仕事を始めて、12年間、教えていました。

そういった中で、日本に関心のある韓国の若い学生たちを教えていたわけですが、いまは福岡に初めて来て生活しているわけですが、今度は、韓国に関心のある日本の学生たちに教える立場で2年目という感じです。

成川：私が最初に韓国に行ったのは、1994年で、小学校5年生か6年生だったと思います。家族旅行だったんですけども、すごく覚えているのは、その年はものすごく暑かったことと、暑い中で金日成が亡くなりました。その当時、韓国では漢字を使っていたので、私はハングルが全然わからないけれども、新聞に「金日成死去」と書いてあるのを見たのをすごく覚えています。もう一つは、旅行中に兄が盲腸になって、日本に帰ってからでは手遅れになるから、韓国ですぐに手術することになりました。韓国で手術をしている間、私は一人で、ナースステーションで看護師さんとずっと遊んでいた時に、韓国語を少し習いました。漢字で筆談ができたので、この漢字は日本語でこう読むとか、韓国語でこう読むとかを教えてもらったのがすごくおもしろかったというか、いい思い出になりました。兄は、二度と韓国には行きたくない。病院の食事もまずかったし、嫌な思い出ばかりだったけれども、私はその時から、大学生になったら留学するみたいなことを言っていました。その時に韓国語に興味をもったのが大きかったです。

2002年、大学2年生の時に1年間休学して、韓国に語学留学しました。もう一回、2005年に交換留学で法学部に留学しました。

そのあと、朝日新聞を辞めてから、コロナの時期は日本に戻ってきていたので、全部合わせて8年くらい韓国にいまも住んでいます。いま思えば、その時々になんかいろいろなことがありました。2002年はワールドカップの年であり、金大中大統領の政権の最後で、盧武鉉が当選する大統領選もありました。2005年は、先生もおっしゃっていましたが、竹島の問題があって、法学部だったので、国際法の授業を受けている時に竹島の話が出ると、みんなが私を見るという結構つらい時期もありました。2002年と2005年の雰囲気がすごく違ったのを覚えています。ワールドカップの年は日韓友好の雰囲気がありました。

そのあと、2017年に朝日新聞を辞めて行ったので、2018年にMeTooがあったり、2017年に行ったばかりの時だろうそく集会の最後の時でした。本当にダイナミックな韓国をずっと体験してきました。

出水：ありがとうございます。きょうは、会場の中にも、長らく韓国にお住まいになった、あるいは一時的に滞在していた方も多いと思いますが、お二人は主にソウルで、私は3年間を釜山なので、釜山とソウルでは違う気がします、そういったことも含めて話を進めたいと思います。

成川さんがこの本をお書きになった動機だと思うんですけども、それなりに受容されるようになった韓国のドラマ・映画ですけども、前提知識がないとよくわからないやり取りや場面、どうしてこういうストーリーなのかという点があると思います。韓国ドラマを見てみると、なぜここまで政治的な話が出てくるのか。あるいは、組織内の権力闘争の話が必ずストーリーに出てくるのかとかですね。私が最近見たドラマでいうと、『シスターズ』ではベトナム戦争が出てきて、ベトナム戦争から持ち帰った特殊な蘭が鍵になっていて、出てくる「将軍」と呼ばれる人物は全斗煥と重なって理解できるようなキャラクターだと思いました。話を元に戻すと、成川さんがお書きになったのは、おそらく、基礎知識がないと楽しめない部分が韓国ドラマ・映画にあるということだろうと思いますが、そういう理解でよろしいでしょうか。

成川：『愛の不時着』を機に、コロナ禍で韓国ドラマを見る人がすごく増えました。朝日新聞の先輩にも多かったですが、見ていてわからないことを聞いてくるんです。そういうところが気になるのかとか、そういうことがわからないのかとか、そういうことを思って書いた部分もあります。

出水：お読みになった方はわかると思いますが、各章だいたいテーマがまとまっていて、第2章が「家族の存在感」となっています。韓国における家父長制の強さみたいなことの中での家族のくびきに苦しむというテーマでまとめられています。第3章は、MeTooのことで、韓国のフェミニズムのあり方。第4章は「格差社会と若者の苦境」ということで、ここに兵役の問題も含まれます。第5章では、まさにきょうのお話にもかわるような、現在でも形式的には戦時体制下にあるというようなことも含めて、韓国の民主化に至るまでの政治的な運動などの影響が書かれています。これらは全部、韓国のドラマ・映画を見る際に、知っていないとよくわからない部分が網羅されていると思います。

話を広げるために、緒方さんにお伺いします。例えば、いま福岡で教えるようになって、学生の皆さんの中で、こういうことが理解できていないと思うことや質問されることがあれば、具体的な作品とともに紹介してくださるとありがたいです。

緒方：結構何も知らないなと感じます。ただ、韓流がはやっている中で、学生たちは知らなくても楽しんでいます。そこからもう一歩踏み込むと、「あれは何だろう？」みたいなことはあるのかなという感じです。

まだ、そこまで「何が」と関心をもつよりも楽しむところで止まっていて、それはもったいないなと思います。授業の中で韓国のドラマや映画を扱いますが、解説をすると、「なるほど」という反応はあります。

映画『1987』を見せる際に、これは私の失敗なんですけれども、見せる前に、時代背景や歴史的なことを話しましたが、どんな場面が出てくるとか、そういうことまでは話していませんでした。私からしたら、当たり前と言ったらおかしいですけども、韓国の人からしても、『1987』の歴史的な背景からすると、こういう場面があるだろうと想像できるけれども、やはり日本の学生はそこまで想像していなかったのでしょうか。目を覆ったり、「先生、これは悪夢を見そうです」とか言われたりしました。前提が全然違うんだなとすごく感じます。あらゆるところで前提が違うと日常的に感じます。

出水：成川さんがこの本をお書きになったきっかけを先ほどお聞きしましたが、最近、ドラマ・映画を見て、こういうことがわからないと質問を受けたり、あるいは、最近の推しとか気になるドラマで、こういうことを知っていないとわからないだろうなということ。きょうのお話自体が、前提知識をさらに付け加えてくださる非常に参考になるお話でしたけれども、何かあれば、エピソード的に紹介していただければありがたいです。

成川：少し違うかもしれませんが、この本を出す時に、ソウルで30～40代くらいの女性記者たちの集まりがありました。特派員や研修で日本に1年くらいいたことがあって、日本語ができるし、日本に興味のある女性記者の集まりだったので、こんな本を出すという話をした時に、食文化の話で「キムチサデギとかですか？」と言われました。キムチサデギってわかりますか。キムチでビンタするんです。韓国ドラマでたまに出てきます。すごいですよね。キムチでビンタするって。

そんな話をされていて、確かに韓国ドラマは、怒りの表現が多いなと思いました。コップの水をかけるとか。これは実際にもあるんですけども、首の後ろを釣るように引っ張られることを「ティッコールテンギダ」と言います。これは日本人の感覚ではよくわからないと思うんですけども、韓国の人は実際にそう感じているんです。怒った時など血圧が上がる感じの時に、ここが引っ張られるような感じがするんだと思います。そういう怒りの表現が多いという話になりました。

逆に、韓国の人には、日本のドラマを見てると土下座をするけれども、日本の人は土下座をするんですかと聞かれました。普通の日本の人は土下座しないですよと言ったんですけども、調べたら、アンケート調査の結果で、土下座をしたことがある人が18%もいました。本当かなと驚きました。皆さん、土下座したことありますか。

釜山映画祭で、是枝監督の『怪物』という日本映画を見た時に、謝罪が韓国の人には奇異に見えるかもしれないなと思いました。『怪物』を見た方がどのくらいいるかわかりませんが、謝っているけれども謝っていないんですよね。形式的に謝る。土下座とか謝罪会見なども同じだと思っていますが、結局、日韓の謝罪した、謝罪していないという問題もそういうところに理由があるのではないかと思います。日本の人は形だけ謝罪したら、謝罪したことになるけれども、本心では謝罪していないから、韓国の人はそこが許せないということなのかなと、日韓のドラマや映画を見ていろいろ考えていました。

出水：きょうのお話は80年代末くらいからの変化でしたけれども、検閲制度が廃止されたり、市場のあり方の変化だったり、そもそも商品としてのドラマ・映画の作り方が変わってきたことの影響は、きょうのお話で非常によくわかりました。

一方で、われわれの研究テーマからすると、社会の変化を反映した結果として、ストーリーの描き方やキャラクターの設定が変わる側面もあると思います。例えば、私自身の個人的な経験からすると、福岡で韓国映画を強くする契機になったのは『8月のクリスマス』だと思います。あの映画は、われわれでも受容しやすいヒューマンドラマというか、何か大事件が起きるわけではないけれども、淡々と丁寧に描かれています。ところが、反転して、同じ俳優が『シュリ』にキャスティングされるという劇的な変化があります。韓国内においてもシネコンができた、大手資本が映画に進出したりという変化があったことでしょう。

また、ドラマを見ていても、なぜ『モレシゲ』があれだけヒットしたかという、タブーだったものを描けるようになった故の衝撃の分下駄を履いたというか、上乘せされていた部分があったと思います。現在の韓流ドラマと同じような恋愛と友情が錯綜する三角関係的なものがありながら、そこに政治性も描いているという意味では、現在の韓流ドラマと同じ要素が全部含まれているけれども、あれだけヒットしたのは、何

と言っても、直近タブーであったものが全面的にドラマのストーリーに組み込まれたことが大きかったと思います。

ドラマの描き方や受容のされ方について、私よりも長く韓国にお住まいになっていると、ヒットするドラマ・映画の質が変わってきたと感ずることがあると思いますが、緒方さんはどう感じていますか。

緒方：質というかパターンはだいぶ変わってきていると思います。社会の変化を反映しているのは、本当にそうだと思います。少し前までは、例えば同性愛は地上波では絶対に描かれなかったけれども、いまは描かれるようになってきました。また、画一的な悪い日本人という描き方だったものが、そういう単純な描き方ではなくなってきたのは、社会全体が変化してきていて、家父長的な家族像に反発する若者などが描かれたりするのは社会の反映でもあるし、逆に、社会を変える後押しをするようなものにもなっています。出水先生がおっしゃったように、政治的な側面が非常に強かった時代はそれが直接反映されていました。いまの韓国社会において一番大きな葛藤の部分は、ジェンダーだったり、身近な価値観の変化が大きいので、そういうものがドラマ・映画にそのまま反映されているような気がします。

きょうの成川さんのお話の中で感じたことは、韓国のドラマ・映画は政治的であるしかないような環境の中でつくられてきたもので、それがそのままドラマ・映画の中で描かれているとあらためて感じました。

よくいわれますが、日本の芸能人は政治的な立場を絶対に言わずに中立を徹底的に保っているわけですが、韓国の俳優や歌手は明確に発言します。そういう土壌は、そもそもエンターテインメントだけでも、それだけの意味にとどまらない、あるいは、社会的な要求もあるのかなとすごく感じます。

出水：成川さんがかかわっている期間での変化みたいなことは何かありますか。

成川：あまり良くないことかもしれないですけど、『8月のクリスマス』のような映画がなくなったと思います。単純なラブストーリーだと、いまの韓国では観客が入らないと思われています。全世界的にそうだと思いますが、映画館で見る映画と家で見る映画が分かれてきています。アクションなどは映画館で見たいけれども、ラブストーリーなら家で見たらいいかという感じで観客数が伸びないから、つくらないようになってきて、多様性がなくなっています。アクション映画のほうが、観客が入るし、そういう映画が多い感じがします。それはいまに始まったことではありません。韓国では、1000万人入ると大ヒットという基準があります。最初に1000万人を動員した映画が『シルミド』でした。その数か月後に『ブラザーフッド』が1000万人を超えます。戦争とか南北を描くと、映画の規模感が出るし、ヒットするし、そういう映画がメインになっていったような感じがします。

本にも書きましたが、映像資料院で字幕の監修をしていると、いろいろな昔の映画を見るんですけど、キム・スヨン監督の『山火事』という映画を見た時に、朝鮮戦争を検閲の中で描くところなのかと思いました。面白かったことは、村の女の人たちの欲求不満です。男の人たちが兵隊で行ってしまったから、村には女の人しか残ってなくて、パルチザンのような感じで山に逃げ込んできた男の人をめぐって、2人の女の人が入れ替わり立ち代わりセックスをするという描き方だったんですけど、現実にはたぶんそうだっただろうと思います。戦争のつらさの一つとしてそういうことがあったと思います。北を敵として描かないと反共映画にならないから少しは描きつつ、もっと戦争の本質的な部分を描いています。

検閲があったから、昔のほうがスペクタクルでない戦争の描き方をしていた部分もあったのかなと思います。そういう戦争の描き方をしなくなってきたのは、逆にあまり良くない意味で、検閲があったから表現が深まっていた部分も確かにあっただろうという気がします。

出水：制約があるから工夫をしたということですね。

成川：そうです。文学においても、韓国では詩集がよく売れていて、いまも日本よりも売れていると思います。詩は検閲に引っかかりにくいんです。抽象的な表現にするから、それが何を意味しているのかは検閲で指摘しにくいから発達するし、それで受け取るものがあります。そういう意味で、映画もそういう面があったのかなと思います。チャン・リュル監督の映画を見ても、中国映画は制限があるからこうなるんだろうなと感じるところがなんとなくあります。

出水：本の中でも取り上げていますが、『はちどり』は最近では珍しいタイプの作品になるわけですか。

成川：そうですね。『はちどり』を見て、全然わからなかったという人も結構いますし、いまの時代によくつくったなと言う映画好きも多いです。対極です。

出水：『はちどり』もそうですけれども、ドラマを見てみると、90年代が回顧される時代になったと感じるストーリーのものが増えているように思います。IMF危機がどのような衝撃を与えたのか。『はちどり』の場合もソンス大橋の崩壊が一つのストーリー上の重要な仕掛けになっています。90年代を懐かしみながら、90年代が今日どういう意味をもつのかということのドラマも始まっているように思いますが、そのあたりのことで何か思うことはありますか。

緒方：90年代というよりも1997年のIMF危機が、いい意味でも悪い意味でも、いまの韓国の大転換点だったと思います。金大中大統領という進歩派の大統領が生まれた意味もありつつ、同時に、金大中大統領が新自由主義を導入して、韓国社会がどんどん競争を激しくしていく中で矛盾というか、発展の転換点でもあり、いまの韓国の苦しさの原点でもあります。そういったことを描く時に、そこにたどり着くのかなという気はします。

出水：成川さんの本の中でも、IMF危機を扱い始めたという話題が出てきますね。何かお奨めのものはありますか。90年代を素材にしたドラマなら「これ」とか、映画なら「これ」というものがあれば紹介していただけますか。

成川：90年代回顧がはやり始めたのは、『応答せよ』シリーズが結構大きいと思います。ドラマの『応答せよ』で1997、1994、1988でしたか。1997はIMF危機だし、1994は金日成の死去があって、南北で戦争になるかという緊張感があったので、そういう時代背景を生かしたドラマづくりをするようになったと思います。

日本でもよく見られている『ムービング』というドラマがあります。最近の韓国のドラマの傾向なのかなと思うのは、ファンタジーと実際の現代史を混ぜる。『ムービング』のキャラクターは空を飛ぶんですけども、ファンタジーだけだとしていけないというか、現実離れしすぎて集中できないと思うんですけども、現代史とつながってくるから、実際にあった出来事がドラマの中で起きると、ファンタジーと現代史が絡まって面白いです。

『財閥家の末息子』も普通の青年が急に財閥家の末っ子として生まれ変わるという話で、そのこと自体はファンタジーで、そんなことあり得ないと思うけれども、IMF危機など現代史で起きたことが起こるから、そこが面白いです。そういうつくり方が面白いと私は思うけれども、韓国の人も面白いと感じるポイントなん

だろうなという気がします。

出水：そろそろ皆さんともやり取りをしながら進めたいと思います。別に質問でなくてもいいので、ドラマ・映画に関して何かあれば、挙手していただけますか。その方にわれわれが答えるというよりは、その方ともほかの方ともやり取りするスタイルで進めたいと思います。何かありますか。

【質問1】：『財閥家の末息子』でいうと、韓国現代史やIMF危機などの歴史的流れをわかっていない若い人たちが、十分に読めるのか。大河ドラマ的な史実とズレはあるとしても、『財閥家の末息子』でいえば、ある程度韓国現代史を知っていると楽しめるけれども、もちろん知らなくても楽しめますけれども、逆に、ドラマをきっかけに若い人たちが勉強してくれたらいいなと思います。

それから、support but not control とか no support but control とか、まさに国が検閲をして、文化支援、または逆に制限してきた歴史の中で、開放してきているわけです。

今度は逆に、国家でなく特にコマーシャリズムの話で、例えば韓国ドラマを見ると、とてもおいしそうにコーヒーを飲んだりして商品を宣伝しますが、日本ではそこまで露骨にやらないですよね。韓国のコマーシャリズムをどう考えるべきでしょうか。それから、シネコンから NETFLIX にどんどん移っていくと、政治ではなく経済の干渉が入ってくるのではないかと考えますが、そのあたりの見解をお聞かせください。

出水：商品としてのつくり手側の変化があるのでしょうか。成川さんからお願いします。

成川：韓国映画界・ドラマ産業にとって深刻なところがあって、日本と全然違うつくり方をするので、そこにすごく影響を受けやすいです。いまの状況で言うと、2019年が韓国映画界にとって一番のバブルの年でした。『パラサイト』のあと、観客数1000万人を超える映画がたて続けに出て、また新しい映画に投資する。しかし、コロナ禍になって観客数が激減して、つくったけれども公開できない状態になって、いま、公開できない映画がたくさんあるので、投資会社は新しい投資をしなくなりました。商業映画に限ってだと思いますが、クランクインできた映画が今年は8本しかないらしいです。具体的に言っているのも、本当にそうなんだろうと思います。

それくらい映画産業が行きづまって、映画会社もこぞってドラマをつくり始めて、NETFLIX をはじめオンライン配信のほうへ行くんですけども、結局、NETFLIX 以外はまったく不調で、たくさんドラマをつくったけれども、編成できていないそうです。

今回、釜山映画祭に行ったら、その話ばかりで、映画の人たちが「おれら、ドラマに行かなくてよかった」みたいなことを言っていました。ものすごい勢いで状況が変わって、資本に振り回されているなど感じました。日本のほうが、あまりお金にならないから地道に続いているようなところも逆にあったりします。IMF危機以降、韓国がアメリカ式にやってきたツケがきているように思います。

2000年までの話をしたので触れませんでしたけれども、揺り戻しがあるというか、表現の自由に関しても検閲というかたちではないけれども、助成金を出さないという圧力のかけ方もあります。皆さんご存じかもしれませんが、李明博・朴槿恵政権の時に、文化人ブラックリストが本当につくられていて、リストアップされている人には助成金が出ないという圧力のかけ方をしているわけです。いつまでも開放ばかりでなく、特に保守政権で揺り戻しがあって、いまでも尹錫悦政権で文化人がよくそういうことを口にします。

出水：日韓の比較をしてみると面白いと思います。どうあがいても商品である。商品として勝負しなければ

ならないという制約が、ドラマ・映画にもあるわけです。韓国のドラマを見てみると、そのことを自覚して、自嘲も含めてドラマのストーリーに取り込んでいる側面もあるのではないかという気がします。

最近見たもので言うと、『二十五、二十一』というドラマがあって、IMF危機直後の1998年から始まるストーリーです。ソウルの中心街で、スクリーンクォーター制を守れと映画人がデモをしているシーンから始まります。そのデモに高校生の主人公が遭遇する場面があります。

あれは、ある種、つくり手たちの心意気を表現しようとしている場面ではないかと思いました。なぜ、あそこを描く必要があるのか。あの場面自体には必然性はないです。それなのに描かれているのは、先ほどおっしゃったように、韓国のドラマ・映画産業の曲がり角にIMF危機があって、スクリーンクォーター制を守ろうという動きを、ストーリーには関係ないのにわざわざ場面の中に入れてしまう。深読みかもしれませんが、私にはそう思えました。単純に市場向けのリサーチをした上でのつくり方ではなくて、その時代を突き放して見るストーリーを描ける点は、すごい感覚だなと思いました。かつて弾圧されたり、直近でもブラックリストに載ったり、締め付けられていたり、日本における単純に資金が得られない状況以上のものを受けてきた中で、どう出し抜くのかという知恵が、つくり手側にあるのかなと思いました。どうでしょうか。

成川：『二十五、二十一』のその場面はすごく有名な出来事ですね。誰もが知っているシム・ウナとかトップクラスの俳優たちがデモをやっている光景は衝撃的だし、皆さんの記憶にあると思います。IMF危機と関係なくないのは、スクリーンクォーター制は、ハリウッドから韓国映画を守ることだと思うので、アメリカから資本が気に入ってくることに俳優たちが危機感をもって、そうはさせないということなので、IMF危機を象徴している場面としては韓国の人には記憶に残っている場面だと思います。

『財閥家の末息子』でも、韓国の人はずごく好きだろうなと思うのは、タイムマシーンみたいなもので、時代を遡って、財閥家の末息子として生まれるから、財閥の会長のおじいちゃんにお小遣いをもらった時に、盆唐（ブンダン）の土地を買うんです。あれは、韓国の人みんなの欲望だと思います。韓国の人みんな、ブンダンを買っておけばよかったと言います。私は、一山（イルサン）という所に住んでいます。90年代にできた第一期新都市ではブンダンとイルサンがあって、イルサンの不動産はそれほど上がってないけれども、ブンダンはものすごく上がっています。イルサンの人みんなブンダンを買っておけばよかったと言います。韓国の人を実感として覚えている現代史を織り込んでいるんだなと思います。意識的に社会的な意義もあるかもしれないけれども、見る人にとってはそこが一番のツボというか面白く感じるポイントだと思います。

緒方：心意気みたいなものもあるけれども、韓国のつくり手の中心がいまの私くらいの世代で、自分の懐かしい時代がまさに90年代の学生時代です。懐かしさを背景にしつつも、恋愛とかアクションは若い人にウケるから、私の世代にも若い世代にもウケる商業的な作戦もあるのかなと思います。若い人たちは昔の背景などを知らなくても楽しんでいます。私の学生たちが楽しんでいるように楽しんでいる、でも、少し上の世代は、先生がおっしゃるような意味も見出せるかたちで楽しめる。幅広く楽しめているように感じます。

ですから、ファンタジーみたいなものがすごく多いです。『いつかの君に (너의 시간 속으로)』でしたか。自分の過去に遡るドラマとかがすごく多いです。荒唐無稽のように思うけれども、ストーリーをじっくり見ると、昔の出来事が散りばめられていて、私が見ても「ああ、あったな」と思って、安心して見られる一つの要素になっている気がします。

出水：何かほかにありますか。

【質問2】：講演の中で、日韓合作の映画の作品の話がありましたが、日韓それぞれのドラマや映画のリメイクが行われていることが、1988年以降の文化史の中でどのように位置づけられるのか伺いたいです。

合作とリメイクは違って、言葉が翻訳されるだけではなく、同じようにつくり直すのではなくて、例えば韓国の作品であれば、日本の人たちが受け入れられる内容に翻訳されて作品がつくられるのだと思います。私の世代だと、『花より男子』は学生時代のだ真ん中で見ていた世代です。そのあと、韓国や台湾でリメイクされたことを同時代史的な記憶として覚えています。リメイクはどう位置づけられるのか伺いたいです。

成川：確かに、ドラマ・映画のリメイクは双方でかなりたくさんあります。韓国ドラマがすごく人気になってから、どちらかというと、日本が韓国のドラマをリメイクすることが増えたと感じています。いろいろ指摘されていますけれども、大衆文化開放前の時期に韓国側が日本映画をパクっていたというか、シナリオを読んでそのままリメイクしただろうと思うものがたくさんあります。正式な交流がないと、過去には、剽窃がたくさんありました。

正式にリメイクできるようになってからは、きちんとお金を払って双方がつくっていると思います。私は合作もリメイクも興味があるので見ますけれども、どちらかというと、失敗のほうが多い印象です。観客が求めているものが違っていたり、表現しようとしたことが伝わらなかったりするのだろうと思います。

成功例でいうと、『鍵泥棒のメソッド』という日本のコメディ映画が、韓国で、ユ・ヘンジ主演で『LUCK-KEY』という映画にリメイクされて、韓国の人は日本原作と知らないまま見ていて、韓国ですごくヒットしました。日本の原作よりも韓国のリメイク版のほうにヒットしているケースです。比較分析を見たことがあります。たぶん多くの作品に共通している可能性があると思うのは、『LUCK-KEY』という映画のポイントで言うと、『鍵泥棒のメソッド』は過程を描いていたのに対して、『LUCK-KEY』は最後に成功するというハッピーエンドにポイントがあります。日本は過程重視。韓国は結果重視。リメイク作品を比べると、確かにそうだなと思います。『リトル・フォレスト』もそうです。すごくたくさんリメイクしています。

韓国映画をつくろうと思ってシナリオを書いているから見てほしいという話があって、きのう、アニメ・ゲーム界の大御所に会いに行ったんですが、その人が言っていたことで印象に残ったことがあります。韓国ドラマは毎回、「え、次どうなるの？」ってものすごく盛り上げて終わりますよね。私が本を出して知ったことは、結構多くの人が、「韓国ドラマは見たいけれども、怖くて見られない。沼にハマるから」という言い方をしていました。見始めると抜けられない中毒性があるのは、毎回次が気になるということです。

その大御所は、マンガ連載もやっていた人なので、「そのやり方はたぶん日本の連載マンガの影響だと思う」と言っていました。その可能性はあるなと思いました。韓国のいまのつくり手たちは、かなり日本のマンガの影響を受けていますから。

いま、日本のドラマのつくり手たちが、韓国ドラマの面白いつくり方を学びたいと言っているけれども、出所は実は日本のマンガかもしれません。はっきりリメイクで契約しているものもあるけれども、相当お互いに影響を受け合っている部分がある印象です。

出水：今回のプロジェクトのキックオフを今年の3月にやった時に、木宮正史さんをお招きしました。木宮さんの最近の著書では、韓国の政治や国際関係の研究者の中では定番の言い方になっていますけれども、「垂直的な関係から水平的な関係になる」という言い方で整理しています。

私が1994年から1997年まで釜山で暮らしていた時は、もちろん日本文化開放前です。ところが、韓国人の同僚は、カラオケに行くと、日本のアニメの主題歌を歌えるんです。それはなぜかと言うと、釜山の場合は、長崎の対馬向けの放送がダイレクトで地上波のアンテナで拾えるんです。意味をわかっているわけではない

けれども、面白いから、長崎放送で放送されているアニメを見て育った世代がいて、もちろんその韓国版がつくられている世代も含めて、アニメの主題歌を歌えるんです。

また90年代の釜山で面白かったのは、釜山の中心部の古本屋街で何が売られているかということ、福岡・博多と釜山の間を運航しているカメラ船内で売られている日本の写真誌や週刊誌などの雑誌が中古で売られています。いまではそういうことは絶対にあり得ない。90年代前半においては、中古の日本の雑誌が売買されるわけです。マンガ雑誌も置いてありました。厳密に言うと、いろいろな意味でマズイと思いますが、そういう店が堂々と釜山の中心部にありました。

それから、古本屋街に行くと、ゲームソフトも売っています。中古のゲームソフトを扱うのはだいたい古本屋ですけども、ゲームソフトの横に日本の古い辞書が置いてあったりします。こんなもの誰が買いに来るのかと聞いたら、その古本屋の店主は、小学生が買いに来ると言いました。私は、衝撃を受けました。彼らはゲームをしたくて、ゲームの説明書を読むために、小学生が自分で日本語を勉強している。そういうニーズがあるから、日本の古い小学生向けの辞書を置いておくと売れる、という話を90年代の段階でしていました。『スラムダンク』などの影響力も同じです。その時期は、まさに垂直的だったと思います。

しかし現状では、例えば、『梨泰院クラス』と『ONE PIECE』の親和性がよく話題になりますけれども、『ONE PIECE』的なものを『梨泰院クラス』のような感じで昇華させる。そして今度は、日本側でリメイク作品をつくる。要するに、循環するようになりました。循環するようになったということが、垂直から水平になったということだと思います。そういった見方ができるだろうと思います。

[質問3]：きょうはありがとうございます。いまの話の逆バージョンになるのかもしれませんが、韓国で日本のドラマ・アニメの海賊版や、字幕が付いていないけれども、見たくて自分でがんばって見たという世代が韓国側には確実に一定数いて、先ほどの講演の中でもおっしゃっていたように、抑圧され続けて、解放された瞬間にその欲が一気にあふれ出すところが、韓国における日本大衆文化の受容の中にあっただのかなと思います。

逆に、日本で韓国のドラマ・映画が爆発的にヒットするようになった流れ。2003年ころは、テレビでヨン様が騒がれていて、気づいたら、みんなが眼鏡をかけてマフラーを巻いていたという記憶です。特に、政治的に日本政府が韓国のドラマや映画や文化はだめだと言っていた状況ではない中で、2000年代初頭にワールドカップ、90年代における韓国のコンテンツ力の高まりなどはあると思いますが、どういう社会の雰囲気とか熱で、逆に日本へ韓国の大衆文化が入ってきたのか気になります。

出水：いまのご質問は、日本側の受容の変化ですね。先ほど言った、垂直的な関係から水平的な関係への移行みたいなかたちで、もともと抑圧されている中でこそある種の欲求があって、いろいろ受容されていた。それが一気に花開く。日本側のいまのK〇〇のブームはどういう受容の展開なのか、どう見るべきかというご質問ですよ。

[質問3]：そうです。

成川：それはすごく難しいです。急に『冬のソナタ』だけで始まるわけではないと思います。先ほどいったように、『フレンズ』というドラマでウォンビンの人気が出たり。私がすごく覚えているのは、2002年に留学して、2003年から韓流ブームだったので、2002年に留学する前は、ほとんど韓国文化に触れたことがないとか、韓国ドラマを見たことがない人が圧倒的に多かったのですが、それでも、私が韓国に留学すると

た時に、友だちの中で、その当時、『HOT CHILI PAPER』という韓国芸能関係の雑誌が日本で出ていたんですけれども、その表紙がウォンビンで、「私、ウォンビンめっちゃくちゃ好きやねん」と言っていて、韓国の俳優が日本でも人気になってきているんだなと思ったのと、BoAもそのころ出てきて、韓国の歌手が日本で人気になっているんだなと思いました。

いろいろなルートでどんどん日本で活動し始めたり、ワールドカップも大きなきっかけになったと思うけれども、その前に、1988年から映画公開をやっていたので、少しずつ韓国文化に触れていたベースがあった上での『冬のソナタ』だったと思います。

『冬のソナタ』についてはすでにたくさんの分析があるので、私が言う意味もないと思いますが、金大中拉致事件とかネガティブな韓国のイメージが特に中年女性の中に強かったけれども、ヨン様みたいなやさしそうな男の人もいるんだと印象が変わったのは、『愛の不時着』の時と似ているなと思いました。『愛の不時着』というドラマは、韓国では特別なヒット作ではありませんでした。いくつかあるヒット作の一つでしたが、『愛の不時着』だけがなぜ日本でこれほどウケたのか。いろいろな人の話を聞くと、北朝鮮に対してものすごくネガティブなイメージが強かった。ミサイルや拉致のことばかりが報道されていた北朝鮮に、ヒョンビンみたいなカッコいい軍人がいるの？みたいな。あれはドラマですけれども、親近感をもてる人たちが北朝鮮にいるかもしれないと初めて思った。ネガティブからの振れ方があったと思います。『冬のソナタ』もネガティブからの振れ方が大きかったと思います。

緒方：私も韓国に渡ったのが2003年です。そういうベースはあったのかもしれませんが、同時に、当時はまだ周囲からは「拉致されないようにね」などと言われたりしました。北と南の区別もついていないし、韓国へ行くと言ったら、「え、なんで？」というのが普通の反応でした。

ソウルオリンピックの頃が元祖韓流だったんでしょうけれども、雑誌の『HOT CHILI PAPER』や『アジアバグース！』という番組があって、S.E.Sなどが深夜枠でちらほら出ていて、マニア的な人たちは知っているけれども、一般的にはまだ知られていない時期でした。

ただ、先ほどおっしゃっていたように、ネガティブが逆に振れたという意味では、『冬のソナタ』は普通の物語で、別に韓国と関係ないので、広く受け入れられたのだと思います。

私は入れ違いで韓国へ行っ、日本で騒いでいるようで、「なんで韓国なの？」と言っていた前の職場の先輩が、「いま、緒方くん、韓国にいるんだよね。ポラリスに連れて行って」って連絡してくるんです。ヨン様の事務所に連れて行ってほしいと、日本から江南にあるポラリスの住所と地図が送られて来るんですけれども、本人は読めないんです。どこで入手したのかわからないけれども、ここに連れて行ってほしいと言うので、私が地図を見て連れて行って、ヨン様が座った席で夕食をその先輩と一緒に食べました。ありがたいと感謝されたけれども、何のことかわからなくて、それを知るために『冬のソナタ』を見ました。

そのころ日本では、ドラマが一周回って、おかしい設定にしないとヒットしないような、例えば『高校教師』などがはったり、それが飽きられたり、そういうころだったと思いますが、『冬のソナタ』は、日本でも今どきないようなベタな恋愛ストーリーですね。あれを日本の俳優がやったら、絶対に笑っちゃうようになっていうセリフが逆にウケた。ノスタルジーのようなものがあったのかなと思います。確かに面白かったです。でも、韓国では全然はやっていませんよね。「え、なんでそんなの見てるの？」みたいな感じ。

でも、最近は、ノスタルジーというよりも、日本でよくいわれているコンテンツ不足もあって、さらに、日本ではつくれないような社会に訴えるような内容など、日本の人が求めるものが韓国のコンテンツに見つけられるようになってきている。かつてはノスタルジーなのかもしれないけれども、いまは、先進的な韓国の問題提起が逆にウケているような感じがします。

日本社会でなかなかできないものが見つけられるというところが受け入れられているのかもしれませんが。それは韓国だからというのとは違う文脈があるような気がします。

出水：われわれが前にいるからわれわれが答えるだけでなく、会場の方からもご意見等があればお聞かせください。

[質問4]：成川さんにお聞きしたいことが2つあります。1つは、大統領が訪米した時に、NETFLIXのCEOに会って、日本円で3,360億円を韓国のコンテンツに投資する話がありましたが、実際に韓国内でのインパクトはどのくらいですか。

成川：その一件に関してというよりも、かなり前からNETFLIXは韓国に投資していて、大々的に報じられていました。それだけでインパクトがどのくらいなのかはわかりませんが、関連でお話すると、韓国で全然違う話が出てきたのが、『THE DAYS』という福島原発を題材にしたNETFLIXの日本のドラマが、世界同時公開したんですけれども、韓国だけが遅れたんです。

韓国では、汚染水問題で尹政権に対して、日本の言いなりになっているという批判がものすごく高まっていた時で、大統領に同行していた金建希夫人がNETFLIX関係者と会ったこともあって、政治的な意図で韓国だけ放映できなくしたのではないかという疑惑が出ましたが、ふたを開けてみたら、結局、日本大衆文化開放が最後までできていなかったという話でした。

映画の等級分類を受けないと、ドラマも公開できないようになっていたようです。オンライン配信にまだ対応できていなかったということです。韓国の一般の人たちは、「まだ文化開放は終わっていないのか？」という感じでした。

水平的な関係がよくわかるのは、いまはもう韓国の人にとって日本の文化は脅威でも何でもない。いまは双方向だし、韓国文化が日本の文化に飲み込まれてしまうという昔の感覚はもう一切ないです。『パラサイト』や『イカゲーム』などがありますから。NETFLIXの件でそういうことが露呈したという関連した話でした。

[質問5]：最近、松竹から九州で力を入れたいと言われている、福原遥の特攻隊の映画があって、実はプロデューサーが、修猷館、九州大学の女の人なんです。松坂桃李の作品をずっとプロデュースしている人だそうです。松竹でいうと、九州大学法学部出身の女性が劇場支配人に就いています。韓国のMeTooの流れの中で女性製作者の話などもあって、日本のテレビでも去年の『エルピス』もそうですが、すごい女性プロデューサーが出てきて、日本映画界もそういう流れが出てきています。そのあたりの韓国の動きはどうなっていますか。そのインパクトは、実は日本も最近はかなり感じるようになってきているので、韓国ではどうなのかを教えてください。

成川：製作者はあまり注目されてきませんでしたが、女性プロデューサーは結構いました。ミョンフィルムのシム・ジェミョンさんが代表的です。監督に関しては、明らかにMeToo以降、『はちどり』など長編デビューした女性監督がものすごく多いです。その人たちが突然映画界に入ってきたわけではなくて、助監督や監督以外の仕事をずっとやってきた人たちに、MeTooで一気に機会が与えられた面があります。しかし、映画界が経済的に難しくなった時に、やはり女性の機会が減ることがあります。大規模な映画でリュ・スンワン監督の『密輸』という映画が今年公開されましたが、商業映画をどんどん当てている監督はやはり男性なんです。女性監督は、MeTooが盛り上がった2018年、2019年くらいに長編デビューしたのはいいけれども、

【質問6】：成川さんの本は、映画とドラマを分けていますが、例えば、是枝監督もこれまでの映画の枠ではなくて、ほとんどNETFLIXの枠でやっているの、ジャンル分けは、日本の中でもほぼ無効になりつつあるのではないかと感じる感じがします。韓国もジャンル分けの無効化が激しくなっていると思いますが、いかがでしょうか。

例えば、ソン・ガンホはずっと映画にしか出ていなかったし、私がインタビューした時にも、映画にしか出ないと言っていたけれども、今回、ドラマに出たのは、映画が難しくなったということもあるけれども、作り手にとって映画・ドラマの境目があまり関係なくなってきたということがあると思います。

出水：おそらく、映画とドラマの垣根が消失するように、音楽もまさに同じ状況です。ネット配信ができることによって、ここ10年の商品の流通の仕方がまったく変わってしまったと思います。例えば、音楽のアルバム概念がなくなってしまったのは、音源をアルバムという形で購入するのではなく、サブスクの中で気に入ったものだけを聞くという流通の仕方が可能になったからです。NETFLIX のインパクトは、音楽における Spotify と同じような意味での、パッケージ流通のかたちを変えてしまうものだったと理解したほうがいいのではないのでしょうか。

交流する人口が増える中で、政治的な事柄だけで韓国を語れないという話ではなくなっていくわけです。そのことを丁寧に考えたり表現したりしないと、デジタルで突如としてK〇〇流行が怒涛のように起きたみたいな、非歴史的な理解になりかねませんし、それが定着しかねないので、われわれの研究プロジェクトも、そのあたりを考えなければいけないと思いました。

89

同時に、文化開放が進んでいるけれども、まだ終わっていないくて、地上波ではいまだに日本語はダメです。いまだに地上波もケーブルも区別はしないわけですが、かたくなに地上波では日本語を流さない。

何が邪魔をしているのか調べたことがあるのですが、別に日本のものがダメだとはどこにも書いてありません。先ほどおっしゃっていたことから想像すると、昔からそうなんです。要するに、風紀を乱すものはダメだということは明確に書いてあって、何がそれに該当するかとなった時に、勝手に業界の人たちが日本のものはダメだとなった。

昔、『スラムダンク』のマンガが韓国に入ってきた時に、それを受け入れたい人たちと、同時に、日本のマンガが韓国で流通すると、韓国の風紀が乱れるという人たちもいたわけです。基本的に、アダルトビデオなどを念頭においている人が多いですけれども、そういうところとつながって、日本の文化を政治的でないかたちで受け入れると同時に、政治的なところに触れないが故に、感情的にいまだに規制されている部分もあります。そういうところは違うというか、危ないというか、もう少し考えなければいけないと思います。

ただ、同時に、かつて韓流がこれだけはやっても、さすがに文学は難しいだろうと思っていました。韓国の文学は基本的にすごく政治的なもので、背景がわからないと、意味がわからないものが多いです。だからこそ、日本の政治的でないエッセイにちかいものや単なる推理小説などが韓国で受け入れられているのだと思います。なので、いま、日本でK文学といわれるほどになっているのは、すごく意外で驚いています。

先ほど言ったように、日本にないものを韓国の中で見出して、受容していくところが日本側にあって、MeTooでも、フェミニズムが日本では社会的な共感が得られないところを、韓国を通じて力を得ているような部分もあります。フラワーデモなどもそういうことがあると思います。

韓国だからとか日本だからという枠を越えて、韓国での競争が激しいから日本での生活を望む、私が教えていた大学でも、就職難の中でオルタナティブとして日本への就職を考える学生もいました。日本が好きだから日本で就職したいという学生もちろんいますが、就職先がないから選択肢として日本を選ぶ学生も増えています。日韓の閉塞感を越える一つの脱出口、あるいは、代案になっているところに可能性を見出せるかもしれないと思います。

出水：ありがとうございました。切り口として、われわれが構えずに親しめるドラマ・映画を入口にした場合に見えてくるものがあると思います。われわれの企画の趣旨として期待したことが反映された展開に、今日はなっていると思います。

[質問7]：先ほど、ジェンダーの話が出たので、それに関連して、キム・ギドク監督のような映画や犯罪行為があってから、映画づくりににおけるジェンダーに対する意識や製作感が前後でどのように変化したのか気になります。

[質問8]：受容というか日本側のまなざしという観点で言うと、『冬のソナタ』が一つのブレイクスルーだったと思います。これは私の思い込みかもしれませんが、『冬のソナタ』はいままでと違うなと感じたことがあって、1つは、2000年より少し前に韓国で暮らしたことのある出水さんならわかると思いますが、『冬のソナタ』で描かれている生活感は、当時の韓国の生活の風景とはずいぶん違います。部屋の中の調度や食事とか。そのへんが日本あるいは海外で受容しやすかったのかと思います。

2つめは、先ほどシバジのポスターがありました、『冬のソナタ』以降だと思いますが、韓国の芸能人や文化人が片仮名で表記される時代になりました。確か、アン・ソングが日本で最初に紹介されたころは漢字で書かれていましたが、NHKなのか電通なのか韓国側の要望なのかわかりませんが、ペ・ヨンジュンと

か漢字で書く必要がなくなりました。BoA やチャン・ドンゴン、ソン・ガンホも漢字で書きません。映画、音楽、文学などカルチャー系ではどんどん片仮名化が進んでいるのに、相変わらずいまだに、尹錫悦も文在寅も金大中也政治などかたい話の人は漢字です。これは何でしょうか。これは一つの仮説ですが、お三方はどうお考えでしょうか。

出水：時間的にまとめて答えることが難しいので、成川さんにお答えいただいて、一旦終わりたいと思いますので、よろしくお願いします。

成川：キム・ギドク監督が MeToo の中でも一番ひどいと韓国の人たちは受け取ったと思います。MeToo は 2018 年に一気に広がりますが、キム・ギドク監督に関しては、その前の年くらいからずっと指摘はされていたので、2018 年より前から、韓国映画振興委員会（KOFIC）などが、セクハラや性暴力防止のための教育を始めていました。韓国では映画づくりや映画祭を開催する時に助成金が出るのですが、助成金を受けるためにはこの教育を受けなくてははいけません。誓約書も書きます。そのころに韓国では、キム・ギドク監督だけではなく、製作現場や映画祭などでセクハラなどができないように制度の改革がありました。実質的に男性が訴えられることが多かったので、女性の進出につながりました。映画会社側にとっては、男性監督や男性俳優の起用がリスクになったので、女性に機会が広がりました。そこが MeToo で変わったところです。

片仮名に関しては、私も朝日新聞にしながら、なぜだろうといつも思っていました。芸能人や監督くらいまでは片仮名で表記しますが、それ以外はみんな漢字なので、いつも取材して困ることは、インタビューした時に、自分の漢字についてまで言わないから、あとで記事にする時に、「漢字はこれでいいですか」と聞いて、すごく難しい漢字だったりするから、なぜ漢字で書かないといけないのかと思っていました。

なぜでしょう。日本の人は、漢字表記でないと名前が頭に入ってこないとよく言います。見た目でないとイメージがわからないのか。なぜかわからないけれども、芸能人に関しては片仮名になっています。その程度です。

出水：これほどフロアの方から発言が出ることは、われわれとしてもうれしいことです。期待以上の展開になったのは、参加していただいた皆さんのおかげです。

今後も定期的に、韓国研究センターと九州韓国研究者フォーラムは、研究会を開催します。来年の 1 月は伊東順子さんをお招きして、同様の企画を行います。今後ともご参加いただきたいと思います。

あらためて、お忙しい中、時間を割いて来てくださった皆さんに感謝して終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

「私が暮らした韓国の30年、疾走する社会で転がる石になれ」

第1部 講演：伊東順子*

司会（木村貴・福岡女子大学教授）：今日は、『「ポスト1965年体制」研究』ということで、韓国研究センターと九州韓国研究者フォーラムの共同研究プロジェクトとなっています。その中で、今回は伊東順子先生をお呼びして、講演をしていただくことになりました。

簡単に伊東先生のご紹介をということですので、私のほうでかいつまんでご紹介させていただきます。

伊東順子先生ですけれども、作家、翻訳家であり、また、編集翻訳業もなされているということで、著書に関しましては、皆さん、ご存じでしょうけれども、最近で言うと、『韓国カルチャー』と『続・韓国カルチャー』、集英社新書から出されていますし、私は、個人的には、その前の『韓国 現地からの報告』のほうまで読ませていただいたりしていました。また、『82年生まれ、キム・ジヨン』の解説なども担当されるということで、幅広くご活躍されている先生になります。

今回のタイトルといたしましては、「私が暮らした韓国の30年、疾走する社会で転がる石になれ」ということで、1990年からの韓国でのご生活についてご紹介いただきながら、伊東先生からの韓国を見る視点というのをご紹介していただくということになっていますので、まずはご講演のほうを50分ほどしていただき、その後、出水先生、緒方先生と一緒に対談をしていただくというふうになっていますので、どうぞ、お付き合いのほどをよろしくお願いいたします。

それでは、伊東先生、よろしくお願いいたします。

伊東：どうも、皆さん、こんにちは。

きょうは雨の中、わざわざ福岡までお越しいただいて、というか、私がわざわざ来たのですが（笑）。今も紹介がありましたが、これからが本当の自己紹介です。

今回のテーマは「私が暮らした韓国の30年」ということで、当初、「九州大学の立派な先生方を前に私のような者が何を話すのか」と申し上げたら、「韓国で暮らしたそのままを話してくれ」と言われました。そこで、今日は壮大なプロフィールを語ることになりました。 サブタイトルは「転がる石になれ」、つまり「ローリング・ストーン」ですね。

実は前回、福岡のユネスコ協会でお話をさせていただいた時に、ビートルズとクイーンと BTS の話をしました。なぜビートルズとクイーンと BTS かというと、その3つをいち早く発見したのは、日本では若い女性たちだったから。男性の皆さんは、実に冷めた目で見ていたのです。先日、NHK のドキュメンタリーで見たビートルズもそうでしたし、私はクイーン世代ですからそこは実体験、そして BTS もそうですよね。

要は、日本の女たちが最初に熱狂し、男たちが冷ややかな目で見たものは、だいたい本物である。もちろん日本の男性の中でも、初期の段階からビートルズやクイーンの実力を見抜いていた人はいたし、「俺は最初から BTS が好きだった」という人もいるでしょうから、「全員が」ということではありません。

でも、やはり圧倒的に女性たちなのです。日本の女たちの目を信じれば、世界の流れがわ、かる。ウエー

* 編集・翻訳業。愛知県生まれ。1990年に訪韓。翻訳・編集プロダクション運営。2017年に「韓国を語らい・味わい・楽しむ雑誌『中くらいの友だち——韓くに手帖』」（皓星社）を創刊。著書に『韓国 現地からの報告』（ちくま新書）、『韓国カルチャー』『続・韓国カルチャー』（集英社新書）、訳書にイ・ヘミ『搾取都市、ソウル』（筑摩書房）などがある。また解説を担当したものにチョ・ナムジュ『82年生まれ、キム・ジヨン』（筑摩書房、斎藤真理子訳）がある。

ブに乗れる。そんな話をしました。

そこで今回はローリング・ストーンズの話。というわけではなくて、これは私の30年が、like a rolling stone、そんなふうだったという意味です。ゴロゴロゴロ、あっちこっちにぶつかりながら転がる石。ローリング・ストーンというのは諺です。A rolling stone gathers no moss、転がる石には苔も生えない、苔はむさないというのでしょうか。石は転がっている限りは苔が付かない。それがボブ・ディランの代表曲「ライク・ア・ローリング・ストーン」や、ローリング・ストーンズというバンド名にもなっています。

私が韓国について書くものは、よく「生活者の視点」と言われるのですが、もう一つ付け加えるなら「フリーターの視点」があると思っています。ガッツリ子育てもしたので生活者も間違いはないのですが、在韓生活の大半は「フリーター」でした。時には「在韓ジャーナリスト」という肩書で文章を書くこともありましたが、そんなことで暮らせるわけもなく、いろんな仕事をしながら生きてきました。

「こんなふう自由に暮らしている日本人が、しかも女性がいるなんてびっくりしたよ」

在日韓国人の先輩諸氏からもよく驚かれたのですが、たしかに1990年代の韓国で日本人といえば、大学の先生が交換教員で行くとか、企業の人駐在員で行くとか、マスコミの人が特派員で行くとか、皆さん所属をお持ちでした。1人で行って、所属無しで住み続ける人はとても少なかった。でも組織から自由であったから、様々な仕事を転々としたから、また別の風景が見られたかもしれないと思っています。

さて今回、私の30年を年表にしてみました。「時の韓国大統領」と「国民一人当たりのGDPの変化」と「私の暮らし」を並べた年表のタイトルは「大統領と私」です。

大統領と私								
大統領				私				
	年		GDP/1人	年	月	職	仕事内容	住まい
盧泰愚	1988年	日本の国会演説	4700ドル	1990年	9月	語学留学	出版社の手伝い	果川で居候
		ソウルオリンピック	↓				日本語家庭教師	方背洞の半地下
	1989年	海外旅行の自由化	8100ドル				現代グループ研修院	大新洞の学生下宿（相部屋）
		林秀卿の訪朝						
	1990年	北方外交		1992年	4月	就職	延世大学言語教育院	奉元洞の全地下
金泳三	1993年	旧総督府の建物の除去	8900ドル	1995年	9月	転職	番組制作会社	江南の1K
	1994年	聖水大橋崩落	↓				番組企画	
	1995年	ゴミの従量制	1万3000ドル				日本取材	
		三豊百貨店崩壊						
		全斗煥と盧泰愚の逮捕						
	1997年	IMF危機		1997年	4月	失業	職探し	
金大中	1998年	IMF管理下の構造改革	8300ドル	～2002年		ビザ難民	データマン	延禧洞のワンルーム
		日韓パートナーシップ	↓			フリーター	コーディネーター	
		日本の大衆文化開放	1万3000ドル				通訳	
	2000年	南北首脳会談					ガイドブック	
	2002年	日韓W杯共同開催					写真撮影	
		女性部の設置					何でもやる	
盧武鉉	2003年	インターネット選挙運動	1万5000ドル	2003年～	3月	起業	企画・翻訳会社	3LDK（オフィス兼）
	2005年	家族法改正 戸籍の廃止	↓				旅行ガイドブック	
	2007年	米韓FTA	2万4000ドル				月刊「やきにく」	
	2008年	大学入試改革「随時試験」						
		多文化家族支援法						
李明博	2008年	（バス専用中央レーン）	2万1000ドル				企画・翻訳会社	延禧洞の3LDK
	2012年	米国産牛肉反対デモ	↓				旅行ガイドブック	
		四大江整備事業	2万5000ドル				機内誌翻訳等	
		竹島上陸						
朴槿恵	2014年	セウォル号事件	2万7000ドル				企画・翻訳会社	延禧洞の3LDK
	2015年	慰安婦合意	↓				旅行ガイドブック	
	2016年	ろうそくデモ	2万9000ドル				機内誌翻訳等	
	2017年	大統領弾劾、逮捕					『論座』連載	
文在寅	2018年	南北首脳会談	3万2000ドル	2017年	4月		『中ぐらいの友だち』創刊	
	2019年	ノー・ジャパン運動	↓	2020年	2月		『韓国 現地からの報告』（ちくま新書）	
	2020年	新型コロナパンデミック	3万5000ドル		3月		パンデミックで仕事なくなる	
		李明博逮捕と朴槿恵恩赦						

私の韓国生活30年は1990年の9月、延世大学への語学留学から始まります。1990年代はまさにゴロゴロ、ストーン。韓国社会も私自身もまさに「転がる石」のごとく。大統領だって容赦なく奈落に落ちたり、よじ登ったりしていました。スーパーマリオのように。

2000年代に入ってから、転がりすぎて角が取れたせいか、私自身の暮らしは少しなめらかになりました。でも大統領の受難はさらに続き、ついに弾劾という事態にもなりました。最終的には7人の大統領を経験しましたので、その時代ごとにお話を進めていきたいと思います。

1. 盧泰愚大統領時代

盧泰愚大統領			私				
年		GDP/1人	年	月	職	仕事内容	住まい
1988年	日本の国会演説	4700ドル	1990年	9月	語学留学	出版社の手伝い	果川で居候
	ソウルオリンピック	↓				日本語家庭教師	方背洞の半地下
1989年	海外旅行の自由化	8100ドル				現代グループ研修院	大新洞の学生下宿（相部屋）
	林秀卿の訪朝						
1990年	北方外交		1992年	4月	就職	延世大学言語教育院	奉元洞の全地下

韓国に対するイメージ変化

まずは盧泰愚大統領時代から振り返ってきたいと思います。盧泰愚大統領の就任は1988年2月ですが、その前年の1987年に韓国で大きな民主化運動が起こります。「6月民衆抗争」と呼ばれていますが、追い込まれた政権側は次期大統領候補だった盧泰愚が「民主化宣言」をします。そこで「大統領直接選挙制の実施」が約束されました。

韓国の大統領選挙は1970年代に朴正熙大統領が維新憲法を發布して、間接選挙制にしてしまいました。大統領のお墨付きの選挙団による間接選挙で、長年にわたる独裁体制が維持されてきたのですが、「それを直接選挙に戻してほしい」というのが、当時の民主化運動の一番の要求でした。

そうして実施された1987年の直接選挙でしたが、勝利したのはなんと盧泰愚自身でした。この時に敗者となったのは金泳三、金大中の両氏。後に二人の時代もやってきますが、ここはまずは盧泰愚時代の印象から話します。

盧泰愚大統領の時代の最大トピックスといえば、やはり1988年のソウルオリンピックです。彼はその直前に日本を訪問して、韓国の大統領としては初めて国会で演説をします。大統領は夫婦で来日されたのですが、うちの母の反応は意外でした。

「韓国の大統領は男前だし、奥さんもものすごい美人ねえ」

意外というか、新鮮でした。それまでの日本で、韓国の大統領夫妻に関して、そういう感想を聞くことはなかったからです。韓国はやれ独裁だとか、そういう怖い国のイメージだったのが、まるで芸能人を扱うような母の言い方。その直後に私は韓国に留学をするのですが、すごく反対と思っていた母親がものすごく賛成してくれた。何かが変わってきたことを感じました。

それは私個人の印象だけではなく、その頃の新聞記事などを調べてみると、「日本人にとっての韓国のイメージが大変化した」と書いてあるのです。1988年の話です。

ただ、これ以降にも日本のメディアは折に触れて「韓国に対するイメージは変化した」ということを何度も繰り返します。ですから、あまりあてにならないのか、あるいは日本人の韓国に対する印象がそれなりに更新しつづけたのか、そこは疑問です。いずれにしろ1988年の時点で、「日本人にとって韓国の印象が大きく変わった」と言われていました。

民主化直後の学生街

その韓国は実際に行ってみて、どんな雰囲気だったのか。民主化はしたものの学生運動もまだ盛んでしたし、警察も非常に暴力的な弾圧をしていました。1991年にはデモで大学生が1人亡くなっています。私が暮らしていた延世大学周辺は、いつも催涙ガスの臭いが立ち込めており、時には大学周辺の道路は機動隊によって完全封鎖されて、近所の人たちと山を越えて下宿に戻ったこともありました。

学生たちを突き動かしたのは「光州事件」です。事件から10年余りたった当時でも、韓国社会で事件の真相がはっきり明かされておらず、大学に入って初めてそのことを知った学生たちも多かったのです。ショックを受けた学生たちは悲しみ、その怒りの矛先は盧泰愚政権に向かいました。盧泰愚大統領は光州事件当時、軍部のナンバー2だった人物です。ナンバー1の全斗煥前大統領とともに、その責任は明確でした。

学生運動のもう一つのテーマは「南北統一」でした。1989年に林秀卿さんという女子大生がヨーロッパ経由で北朝鮮に行き、平壤で行われた学生祭典に参加しています。韓国政府はこれを認めずに、彼女は帰国後に逮捕されてしまいます。「統一の花」と呼ばれた林秀卿さんは、学生運動をしている人たちの間ではヒロインでした。

「順子オンニ、この写真を見てください。林秀卿オンニです。きれいでしょ？」

当時、同じ下宿にいた延世大の女子学生から、グラビアを見せられたことがありました。学生運動の闘士に「きれい」という言葉を使ったのには驚きましたが、韓国はある意味で日本以上に「外観重視」、しかも「あからさま」という面はありました。

住まいを転々と

どこで暮らそうが30年も生きていれば、長さの分だけ良いことも悪いこともあります。ただ「韓国だから」という理由で苦勞したのは、やはり「住居問題」です。居候→学生下宿の相部屋→半地下→全地下→ワンルーム、これが1990年代のソウルでの私の住まいの履歴です。

最初はソウル大学の学生宅に居候。彼は在日の友人の親戚だったのですが、日本から来る私の面倒を見るという口実で、ちゃっかりと自分の恋人まで同居させてしまいました。私は「お目付け役」ということで、その恋人と同じ部屋を使っただのですが、私の眠りが深すぎたのか、なぜか二人には赤ちゃんができてしまった。

そこからは普通に大騒ぎでした。男の子はまだ軍隊にも行っていなかったし、女の子のほうも昔の韓国ですから大変な大問題です。しかも二人はそれぞれ慶尚道と全羅道の出身です。日頃からキムチの味でも揉めるほどでしたから、嵐のような日々。最終的には2人は結婚して新居へ、私は訪韓3ヶ月にして一度目の引っ越しをすることになりました。

引越し先は、方背洞の「半地下」。例の『パラサイト』という映画に出てきた半地下生活です。半地下というのは本当にすごい所で、部屋の半分が地中に埋まっています、上のほうに窓があります。そこから道行く人の足だけが見える。ご飯を食べたり、勉強をしたりしながら、ふと視線を上げると、足だけが行ったり来たり。そこで暮らしながら延世大学の近くで、学生下宿を探しました。半地下の一人暮らしよりも、下宿生活をして韓国人の友だちをつくらうと思ったのです。ただ、これも簡単ではありませんでした。

日本人はお断り？

当時の下宿には「独房」という名の一人部屋と、「合房」という名の相部屋がありました。私はお金がなかったし、韓国の学生と暮らしたかったので相部屋を希望しました。ところが下宿のおじさん（主人）は駄目だと言うわけです。「日本人が来ると、韓国人が嫌がる」、「韓国人は日本人が嫌いなのだ」と、はっきり言われました。それでも私は「とにかくお金がないので、相部屋に住ませてほしい」と言って揉めていたら、お

ばさん（主人の妻）がぬっと現れて、「ケンチャナ、ケンチャナ（大丈夫、大丈夫）」と言いながら、私の荷物をその相部屋のほうに運んでしまいました。

その相部屋というのは8畳ぐらいの部屋で、半分にはルームメイトの布団が敷いてあり、あと小さな洋服ダンスと本棚。本棚には家族写真があり、本人と思わしき若い女性が写っていました。残り半分が私の空間だと言われたのですが、少し心配になりました。自分が不在中に日本人留学生が入っていたら、彼女は不快に思うかもしれません。

ところがその夜、ルームメイトは帰ってきませんでした。翌朝、朝食の席に現れた彼女は、他のおかずに手は付けず、なぜか昆布だけを食べている。私は恐る恐る下手くそな韓国語で声をかけました。

「なぜ、昆布だけ食べるのですか？」

「別に」

冷たい返事に、他の下宿生も押し黙っていました。やはり、日本人のルームメイトは嫌がられるのだろうか？ ちょっと落ち込んだのですが、その夜、不思議なことがあったのです。

「こんな夜更けにリンゴかよ？」

起こされたのは、夜中の2時過ぎでした。なんでこんな時間にと思ったけれど、ルームメイトに嫌われたくなかったので頑張って起きました。彼女はリンゴを剥いていて、私にも食べろと。仕方なく一つを口に入れ、美味しいと言うと、彼女はにこやかに笑いました。綺麗な子だなと思いました。彼女は何か話そうとしていたのですが、あまりにも眠かったし、韓国語にも自信がなかったので、そのまま寝てしまいました。翌朝目が覚めてびっくり！なんと部屋の半分がもぬけの殻、ルームメイトも彼女の荷物も消えていたのです。残されたのは、お皿にのったリンゴの皮とナイフだけ。あれは夢ではなかった。

「夜中に引っ越しちゃったみたい。下宿代を何ヶ月分も滞めていたらしくて、おばさんは大騒ぎよ。お金を貸していた子もいたけど、あなたは大丈夫だった？」

驚いたのは、下宿の主人が彼女の名字すら知らなかったことです。学籍番号も、親の連絡先もわからない。何を信用して部屋を貸したのだろう？と考えながら、さらに驚くべきことに気づきました。そういえば、私も何も知らせていない？下宿に入る時に一か月分の家賃を渡しただけ。おばさんはニコニコして受け取ったけれど、私の名前も、住所も、パスポートのコピーも何も要求しなかった。もちろん、契約書などありません。

そういう時代だったのです。光州事件の真相究明や南北統一のために闘う学生と、それを暴力的に弾圧する国家権力。その一方で、人々は日々の暮らしで途方にくれたり、怒ったり。もちろん下宿では楽しいこともありました。新しいルームメイトもすぐ決まり、その子のお母さんは「日本人と暮らせるなんて娘はラッキーだ」と喜んでくれました。私も嬉しかったし、夫の意見をスルーして私を住まわしてくれたおばさんもホッとしたと思います。

北方外交と広がる世界

盧泰愚大統領の時代といえ、記憶に残っているのはやはり「北方外交」です。それまでの韓国では社会主義に関するものは全てが禁止、いわゆる東側諸国は敵国扱いでしたが、それが大きく変化しました。1990年6月、ゴルバチョフと盧泰愚大統領は会談して、その年の9月にソ連と韓国の国交が樹立されます。それから2年後の1992年に、今度は中国との国交も結ばれます。

この北方外交のおかげで、韓国人にとって世界がぐっと広がりました。私の周囲でも面白いことがいろいろありました。モンゴルやベトナムから来る留学生の中には、北朝鮮訛りを話す留学生もいて、先生からい

つも嫌な顔をされていたり。もともと平壤勤務だった人が、いきなり「お前、明日から韓国に行け」というようなこともあったと聞きました。

さて、その頃の私は語学学校に籍をおきながら、韓国の出版社でバイトをしたり、日本語の家庭教師をしたり、フリーター生活をスタートさせていました。そんな時に現代グループの研修院で日本語のネイティブスピーカーを募集していると聞いて、そちらにも通うことになりました。

財閥グループのスパルタ式教育

当時、現代グループやサムスンなどの財閥グループはどこも、山の中に研修院を持っていてスパルタ式の教育をしていました。「お前は英語、ロシア語、中国語、日本語」といった具合に社員を分けて、泊まり込みの語学研修をやらせていたのです。

私が派遣された部署は日本語コースだったのですが、研修生たちはまるまる3カ月間、一回もおうちに帰れません。しかも24時間、日本語以外は使ってはいけない。そういう過酷な環境において、日本で通用する即戦力を養成するということが行われていました。彼らは本当に優秀で、3カ月後には見事に上達して、日本語を使いこなしていた。本当にすごいなと思いました。

当時の韓国はものすごい日本語ブームなのに、ネイティブスピーカーが足りない。あちこちで日本語講師を募集していました。私も1992年春、延世大学の言語教育院というところに就職して、日本語の先生になりました。資格など何も求められずに、4年制の大学を出ていればいいと。あとは作文。それは「本当に自分で書いたのか」と疑われるほど褒められました。ヒッピーみたいな風貌が不自信を持たれたのでしょうか。でも、もともと作文だけは得意で、それはいろんな場面で役に立ちました。ライター業はもちろんですが、日本語講師の時は教材づくりや、テスト問題の長文作成なども。他の先生の分まで作ってあげて喜ばれました。

水没した全地下の部屋

就職記念に学生下宿を出て、3回目の引っ越しをしました。こんどは半地下よりもさらに深く潜った全地下の部屋。そこが一番安かったからです。

その頃の韓国には小綺麗なワンルームのようなものはありませんでした。やっと麻浦あたりにオフィステルが1つ2つでき始めた時代。女性の1人暮らしは許されず、みんな親戚の家に住んでいました。そんな状態で無理やり見つけたのが、シェアハウスの地下室だったのです。

新築シェアハウスは南フランスにあるような黄色い壁の美しい家で、ご近所からは「黄色い家」と呼ばれていました。周辺の風景からは明らかに浮いていましたが、実はそれがとんでもない家で、浮くどころか沈んでいったのです。

最初は飼っていた猫がおしっこをしたと思ったのです。ところが拭いても拭いても、床に水たまりができる。そのうちに水たまりが大きくなっていき、やがて床上浸水。仕方ないので上の階の空き部屋に引っ越しましたが、その後も水位はどんどん上がっていききました。

最終的に水没しました。家の上のほうは残っているのですが、私の部屋だけが水没した。私は上の階に逃れてはいたのですが、下の階が水没している家というのは、皆さん住みたくないですね。それでみんな引っ越していく、出ていくわけです。

私も当然、引っ越したいわけです。でも大家が「チョンセ金」(保証金)を返してくれない。韓国のチョンセ制度は次に入る人から保証金を受け取るという暗黙のルールがあるのですが、水没した家に入る人などいません。本来は大家が保証金を返還しなければいけないのですが、大家はそのお金を他に回していますから、「ない袖はふれない」というわけです。

契約期間がすぎてもお金を返してもらえない人はたくさんいます。最近では「チョンセ詐欺」という言葉もあり、韓国文学やドラマなどでもけっこうな頻度で登場する悲劇です。

2. 金泳三大統領の時代

金泳三大統領			私				
年		GDP/1人	年	月	職	仕事内容	住まい
1993年	旧総督府の建物の除去	8900ドル	1995年	9月	転職	番組制作会社	江南の1K
1994年	聖水大橋崩落	↓				番組企画	
1995年	ゴミの従量制	1万3000ドル				日本取材	
	三豊百貨店崩壊						
	全斗煥と盧泰愚の逮捕						
1997年	IMF危機		1997年	4月	失業	職探し	

旧総督府の建物を撤去

1993年から金泳三大統領の時代に入ります。民主化後初の直接選挙で盧泰愚大統領が勝利した時、負けたうちの一人は金泳三でした。長らく民主化運動のリーダー的存在だった野党党首。この時の選挙で彼に負けたのは金大中です。ショックでした。この時はテレビで選挙特番をずっと見ていましたが、私も友人たちもみんな金大中を応援していたので、とてもがっかりしてしまいました。

とはいえ金泳三でも……金泳三大統領になって世の中はとても明るくなりました。それまではずっと軍部出身の大統領だったのが、初めてのシビリアン。金泳三政権は「文民政府」と命名されました。韓国社会全体がワクワクしているのを感じました。

彼が最初にやったのは、旧日本総督府の撤去です。帝国日本が建てた巨大な建物が、1993年以前にはソウルの街の真ん中に残っていたのです。これをとうとう壊してしまうわけです。

なぜ撤去するかといえば、やはり日本の植民地時代の精算ですね。日帝残滓、日本帝国主義が残したものは、すべて一掃すべきだということです。ただ、真面目な人たちの中には、「こういう歴史的な遺産は、残しておいたほうが韓国のためになる」という意見もありました。「撤去すべき」、「残すべき」という人たちが大もめにもめて、結局、撤去することになったのです。

私自身は当時も今も、どちらの意見にも一理あると思っています。もちろん、日本人の立場でどうこう言うことではありませんが。ただ結果的には撤去したことで、景福宮も見えますし、北岳山も見えます。景観的にはすっきりして、気持ちが良くなりました。そもそも王宮を塞ぐように総督府の建物を建てたというのが野蛮の極み。ただ建物が撤去されたことで、植民地支配のグロテスクさを後世の日本人が見ずにすむというのは、少しモヤモヤします。

ゴミの従量制——環境保護意識の高まり

それともう一つ、金泳三政権で画期的だったのは、ゴミの従量制です。それまで韓国の人でも黒いゴミ袋に、スーパーの袋にゴミを入れてポンポン捨てていたのですが、今後はゴミ問題が深刻になるということで、ゴミをきちんと分別して、捨てるにはお金が要ることになりました。有料のゴミ袋が義務化され、そこに詰め捨てて捨てるのです。

この時期、環境問題というものを、ものすごく意識させられました。割り箸も使ってはいけません。爪楊枝もダメ。森林を守らなければいけないから。それらのことを韓国の人々は、この金泳三時代に学んだのです。

私は今、東京にいますけれども、びっくりしたことに、東京都はまだ従量制をしていないのです。自分の好きなだけ、ゴミを出していいのです。東京都というか、うちの区だけかもしれませんが、そのくせゴミ問題が深刻だと言っています。でも、韓国で30年前にもうゴミは従量制をしていたのに、なぜ日本はしないのか不思議です。

韓国は1990年代初頭からすごく頑張ったおかげで、今は生ごみのリサイクル率が世界一位になるなど、環境問題でも非常に合理的なシステムができています。人々の意識が変わるのを、暮らしていて実感しました。

聖水大橋と三豊百貨店

一方で、金泳三時代は「呪われた時代」とも言われます。その最初の出来事は1994年、聖水大橋の崩落、橋が突然落ちてしまったのです。そして1995年には三豊百貨店の崩壊事故も起きています。地震でも何でもないのにデパートが突然崩れてしまい、大変な数の犠牲者が出た。こういう事故が相次いだのが金泳三の時代です。

もちろん金泳三時代につくられたものではないのに、彼のせいにするのは気の毒なのですが、やはり金泳三時代という思い出すのです。加えて1997年にはIMF事態で、国そのものがつぶれてしまいそうになります。

後になってから気づいたのですが、私の住んでいた家が浸水し、部屋が水に埋もれしまったのも、それにつながるものかもしれません。当時の私はものすごく落ち込んだのですが、私1人だけ運が悪かったわけではなかった。この国で暮らす以上、そういう時代の苦しみのようなものを、外国人ではありましたが、味わっていたのではないか。それを後になってから思ったわけです。

手抜き工事とチョンセ詐欺

さて浸水した家その後どうなったか？ 当時、私の日本語クラスには、SBSという韓国のテレビ局の人たちがいました。サムスンや現代グループだけでなく、テレビ局も「日本から学べ」の時代です。生徒の1人が『それが知りたい』という告発番組のディレクターだったので家の件を相談してみたら、「韓国の恥だ。自分たちが解決してみせます」と、頼もしいことを言ってくれました。

彼らの作戦では、大家を呼び出すのがディレクターF氏、それを撮影するのがカメラマンのO氏、説得するのがドラマ担当のK氏、さらに報道部のS氏も加わり大捕物帖が行われたのですが、すんでのところで大家が国外逃亡、結局は取り逃がしてしまいました。

さすがに落ち込みました。さらに悪いことは重なるもので、テコンドーの練習中にアキレス腱切断。しばらく引きこもりになったのですが、その家が水没中。私の人生の中でも最悪の時で、これはもう無理だと日本に帰ることにしました。ところが、荷物をまとめて送った船便が日本に届く前に、私は再び韓国に戻ってきてしまいます。

痛恨の作戦ミスで大家の国外逃亡を許してしまったSBSの人たちがすごく反省をして、私のために次の職場を用意してくれたのです。世界中どこでもそうだと思いますが、捨てる神あれば拾う神あり。SBSの彼らには今でも感謝しています。ただ、その職場もとんでもないことになるのですが。

空き巣と美しき韓国男性

1995年9月、新たな職を得て江南の1Kに引っ越しました。心機一転、新しい環境となったのですが、いきなり事件に巻き込まれます。まあ事件というほどでもないのですが、在宅中にもかかわらず、空き巣に入られたのです。

ある日、とても会社に行くのがつらくて（そういう日はありますよね？）、少しだけさぼろうと思って、家で寝ていたのです。1Kというのは寝室があり、小さなキッチンとトイレがついている。朝の10時ぐらいだったと思います。トイレでドカン！というものすごい音がして飛び起きました。トイレの何かが壊れたと思って、扉を開けたら、そこに男がいたのです。鳥打帽をかぶった男が、蓋をしめた便器の上に座っていて、目が合ってしまった。

思わず扉を閉めたのですが、さてどうしたらいいものか。私なりに頭を使い、とにかく逃げ道を確保しなければいけないと思って、玄関を開けました。まだ携帯電話も何もない時代です。その後に「ああ、そうだ。警察を呼ばなければ」と思い、近所のクモンカゲ（小さいスーパーのようなお店）に走って、そこのおじさん（店主）に訴えたのです。

「家に空き巣が、泥棒が入ったから、助けてくれ。警察に連絡してくれ」

そうしたら彼はなんとテレビの後ろから銃を取り出して、それをズボンのベルトにはさんで、「家はどこだ？」と。

ひええ、まさかの銃撃戦？これは大変なことになったと思ったのですが、とにかく彼を家まで案内したわけです。

「ここだ」と私がトイレを指差すと、彼はドアノブに手をかける。ところが中から犯人が中から鍵をかけてしまっていて開かない。彼は腰の銃を確認しながら、犯人に向かって声をかけます。

「ヨボセヨ。ケセヨ？」（すみません、いらっしゃいますか？）

この場面でも敬語？ というマナーの良さに驚いたのも束の間、彼はしだいに興奮し出して、バンと足で蹴ってドアをこじ開けたのです。ところが既にもぬけの殻、洋式トイレの蓋の上に足跡が残っていました。そこは3階だったのですが、ガスの配管伝いに上がって、トイレの小さな窓から侵入したんですね。

「平日はみんな会社に行くから、空き巣に狙われやすいんです。外出する時は、窓を閉めるようにしないとね」

犯人としては「空き巣」のつもりが、その日に限って私が仕事をサボって寝ていたわけです。

「ところでなんで銃を持っているんですか」

その時は銃だと思ったのですが、確かに銃は銃なのですが、よく見たら手作りの空気銃でした。ビニールテープでぐるぐる巻いたようなものです。あまりにも構えがカッコよかったので、本物だと勘違いしたのです。ただ、韓国の人は、当時何かあった時のために、そういうものを持っていたのではないかと思います。

それは1995年のことなのですが、その少し前の92年にアメリカで、いわゆる「LA暴動」が起きてコリアンタウンが襲撃されるという事件がありました。その時にコリアンタウンのスーパーの店主たちは、みずから銃で武装して暴徒と戦ったのです。みんな軍隊経験がありますので、銃は使えるわけです。

私はそのイメージがあったので、あの手作り銃も、何かそれにつながるものかなと当時は思っていました。いずれにしろ、格好良かった。ものすごくりりしかったです。韓国男性は美しいと思いました。

再びの試練

仕事は楽しかったし、韓国人の仲間とも仲良くやっていました。日本紹介の番組ということで、九州にも撮影に来ました。「汽車に乗って九州旅行」という番組は、JR九州さんとのタイアップで、釜山港からビートル2世に乗るところからスタート。その時に取材した場所が今も韓国人に人気の観光地になっており、それは大変うれしく思っています。

ただ会社のほうは大変で、ずっと給料の不払いが続いていました。社員はじっと我慢して働いていたのですが、でも不満はたまっていたのですね。朝みんなが会社に出勤したら、社長の自慢の外車がめった打ちに

されていたこともありまして。みんなで労働組合も結成したのですが、結局会社はつぶれて、社長は海外逃亡。それが1997年の4月です。

ただ、この社長がすごく面白いのは、その何年後かに、仁川空港でばったりと出くわしのです。「海外逃亡した人が、なぜいるのですか」とは聞けないので、「入国できないと聞いたのですが、大丈夫なんですか？」と言ったら、「弟のパスポートを借りているのだ」とうれしそうに（笑）。

みんな頑張れば生きられるのだと思いました。これが金泳三時代です。

金泳三時代の最後にはアジア金融危機で、韓国も国家倒産寸前、国中が大騒ぎとなりました。いわゆるIMF危機ですが、そこに救世主が現る。次が金大中の時代です。

3. 金大中大統領の時代

金大中大統領 年		GDP/1人	私 年	職	仕事内容	住まい
1998年	IMF管理下の構造改革	8300ドル	～2002年	ビザ難民	データマン	延禧洞のワンルーム
	日韓パートナーシップ	↓		フリーランス	コーディネーター	
	日本の大衆文化開放	1万3000ドル			通訳	
2000年	南北首脳会談				ガイドブック	
2002年	日韓W杯共同開催				写真撮影	
	女性部の設置				何でもやる	

IMF 危機からの脱却

1998年2月、金大中が大統領になります。戻りますが、1987年12月の選挙で盧泰愚に負けたのは、金泳三と金大中でした。2人が1つになれば、野党が統一候補を立てれば勝てたのに、最後まで統一できずに負けてしまった2人のうち、先に大統領になったのが金泳三。その金泳三がIMF危機でボロボロになり、次に出てきたのが金大中です。ただ、この時、金大中は圧勝ではなく、ぎりぎりの勝利でした。

後からふりかえれば、金大中ほど成功した大統領はいないと思うのですが、当時の韓国の人はそこまで彼に期待をしていなかった。どちらかと言ったら負けるとされていたのですが、最後に野党の大物政治家である金鍾泌と、浦項製鉄（現ポスコ）の朴泰俊という財界の重鎮が金大中側に付いて、それで何とかぎりぎりで勝利したのです。

ぎりぎりで当選した金大中でしたが、大統領になった後はすごくて、まずはIMF管理下での構造改革を断行します。再起不能の会社をつぶし、大量解雇も厭わない、ものすごく激しい改革をします。街は失業者だらけになりました。ところが暴動などは起きなかったのです。そこには一番底辺の人たちの、金大中大統領に対する信頼があったのだと思います。ものすごく痛みを伴う改革を経て、韓国は何とか国家倒産の危機を乗り越えます。

日本の大衆文化開放

次に金大中大統領は1998年、日本を訪問します。日韓パートナーシップ宣言、お相手は当時の小渕首相ですね。その時に、「過去のことはもうこだわらない。未来志向で行きましょう。日韓はこれから隣国として仲良くやる。さらに、日本の大衆文化を開放する」という約束をします。

日本文化開放というのは、それまで韓国で禁止されていた日本の映画や歌謡曲、漫画などを自由に読めるように、自由に放映できるようにする。それを段階的に進めるという約束を、この時にしたわけです。この直後に大番ヒットしたのが、岩井俊二監督の『Love Letter』です。主演の中山美穂はすごい人気でした。彼

女の「お元気ですか」というセリフは流行語のようになりました。

学生運動の闘士みたいな女の子に、「この映画を見て変わった」と言われたこともあります。

「日本人は鬼畜だと思っていたけれども、こんなに優しい人だというのが分かりました」

そんなに単純に鬼畜から優しい人って、映画1本で？はっきりそういう言い方をされて、びっくりしました。

南北首脳会談

さらに金大中大統領がすごいのは、その後に南北首脳会談を実現させたことです。「日本と仲直りして、未来志向にする」のは、その布石でもあったわけです。つまり南北首脳会談をする上で、日本とアメリカとの関係を強固にしておかないといけない。まずはやりやすい日本。その時は小渕さんですから、その関係を強固にしておいて、次に北朝鮮との関係をつくるという。非常に頭がいいし、行動力もあるし、それを周りで動かしてくれるスタッフもいた。

任期の最後はワールドカップの共同開催、韓国はベスト4進出、それが花道となるという実に美しい終わりをしました。たった5年間でこれだけのことをした。しかも前政権の時に準備できたわけではないのです。韓国政府というのは連続性がありません。前政権と連続性がない中で、それをやってしまう。大統領もすごいのですが、その下の官僚たちもまた、ものすごく仕事ができる人たちがそろっているのだろーと思えます。5年間でこれだけのことをやったというのは、すごく不思議な感じがします。

韓国の大統領は1期5年制です。2期はできないので、次に持ち越せない。基本的には、自分の任期中に全部やってしまわなければいけないし、それが不正にもつながると言われます。みんなが金大中のようなスーパーマンではありませんから、そこが韓国政治の中で一番というか、重要な問題の中の一つだと私は思っています。

フリーランスのビザ難民

金大中大統領は素晴らしいのですが、私のほうは勤め先が倒産して、いきなり失業者。フリーランスのビザ難民となりました。日本の会社や新聞社から仕事をもらったり、知り合いの会社をお願いしてビザを出してもらったりと、とても大変でした。ただ日本の大衆文化開放とかワールドカップの共同開催とか、日韓関係が良くなったおかげで、仕事がわんさか、というほどではないのですが、仕事には困りませんでした。金大中大統領には本当に感謝しています。

当時はまだ韓流ブームの前だったので、韓国語ができるフリーライターみたいな人は少なく、おかげで様々な分野の仕事をいただくことができました。ただライター業だけでは生活できませんから、データマンからコーディネーター、通訳など実にいろいろな仕事をやりました。

データマンというのは、大手新聞や週刊誌の立派な記者さんの影となって、データだけを集めて、その人がお書きになる記事の礎となる。コーディネーターというのは、日本から来た偉い人たちが誰かに会いたいと言ったら、その道筋をつける仕事です。あと頼まれてガイドブックの写真を撮ったり……。仕事は選ばずに、何でもやる、野良猫フリーランサーでした。そのおかげで、いろいろな場面に立ち会えました。面白かったです。

会社の倒産と同時に、延禧洞のワンルームに移りました。5回目の引っ越しです。半地下か地上かで悩んだのですが、不動産屋さんの「一度落ちたら上がって来られないよ」という忠告に、無理して地上階の部屋を選びました。1997年から2003年までの6年間、そこで頑張った結果、たしかに暮らしは落ちずに上がったのです。

4. 盧武鉉大統領時代

盧武鉉大統領			私				
年		GDP/1人	年	月	職	仕事内容	住まい
2003年	インターネット選挙運動	1万5000ドル	2003年	3月	起業	企画・翻訳会社	3LDK（オフィス兼）
2005年	家族法改正 戸籍の廃止	↓				旅行ガイドブック	
2007年	米韓FTA	2万4000ドル				月刊「やきにく」	
2008年	大学入試改革「随時試験」						
	多文化家族支援法						

史上初のインターネット選挙

時間が押してしまったようですが、ここから先の2000年代、私自身は少し「安定期」に入るので、韓国社会で印象に残ったことだけを、かいつまんでお話していきます。

次は、盧武鉉時代です。盧武鉉大統領の時代も、実にいろいろなことがありました。そもそも彼が大統領になったのが大事件でした。彼は2002年冬の選挙で当選したのですが、それは「史上初のインターネット選挙」、ニューヨーク・タイムズでも取り上げられて大きな話題となりました。選挙にインターネットを利用することで、若者たちの関心が一気に高まったのです。

さきほどは触れなかったのですが、金大中大統領の功績の一つは韓国社会のIT化でした。IT化を先導したのは若い世代です。また、その年の韓国はワールドカップの興奮がずっと冷めやらず、若者たちがとても元気でした。ワールドカップはナショナリズムを大いに刺激したのですが、それは政治的関心にもつながったと思います。盧武鉉大統領の誕生は奇跡でした。

彼は明るくて愉快な人という印象だったのですが、大統領になってからはとても苦労しました。やはり国を運営するということで、それまでの運動圏（学生運動や民主化運動のこと）的な理想論だけでは通用しない、政治外交のリアリストにならなければいけないわけです。さらに金大中政権から受け継いだ新自由主義的な経済システムと、彼自身や周囲の社会民主主義的なものとの折り合いをつけていかなければならない。

彼なりに政治外交も経済も頑張ろうとしたと思います。でも仲間や支持者からの理解が得られず、非常に孤立した状態になります。党も分裂してしまう。イラクへの派兵や米韓FTAの締結も盧武鉉時代ですが、ものすごい反対運動が起きました。支持率も一時期は10%台まで下がってしまいます。

韓流ブーム

私自身はそろそろビザ難民も苦しくなって、2003年3月に起業します。IMF危機で外貨不足となった韓国は、外貨を得るために「投資ビザ制度」を新設しました。5万ドル持ち込めば起業して、ビジネス用のビザも取得できるというもの。そこでお金をかき集めて会社をつくりました。

それからは棚ぼた。起業してしばらくすると、日本で『冬のソナタ』が放映されて、空前の韓流ブームが起きます。芸能界にはあんまり関心がなかったのですが、でも押し寄せる仕事の波に、必死にスターの顔と名前を覚えて頑張ったのです。かるた取りのように。この人がウォンビンで、こちらがチャン・ドンゴンでとか。

それまでの私はどちらかと言えば、韓国人に日本を紹介する仕事をやっていたのですが、この頃から日本人に向けて韓国を紹介する仕事が多くなりました。日本のメディアに頼まれて韓流スターにインタビューしたり、韓流スター御用達のお店を紹介したり、家族や学校や軍隊など韓流スターに関連する韓国社会の解説を書いたり。そのころ私が出した本はこれ、『韓国ドラマ・映画スター事情』（舞かな子著 2004年7月、ブックマン社）です。私史上で最も売れました。舞かな子というのはペンネームなのですが、意味は「ま、い、

かな（まっいいかな）」は座右之銘です。

5. 李明博大統領の時代

李明博大統領			私				
年		GDP/1人	年	月	職	仕事内容	住まい
2008年	(バス専用中央レーン)	2万1000ドル				企画・翻訳会社	延禧洞の3LDK
2012年	米国産牛肉反対デモ	↓				旅行ガイドブック	
	インターナショナルスク	2万5000ドル				機内誌翻訳等	
	竹島上陸						

ソウル市長時代の李明博は素晴らしかった

2008年からは李明博大統領時代なのですが、残念ながら彼は日本でも韓国でも、あまり評判がよくないようです。でも私は李明博という人物がかなり好きというか、非常に好感をもっていました。彼は大統領になってからではなく、ソウル市長の時代が素晴らしかった。金大中と同じく、みんながびっくりするような行動力で、「お見事！」というような仕事が多かったのです。

中でも一番びっくりしたのは、バス専用レーン。道路の真ん中にバスを集めてしまうという「偉業」ですね。「そんなの無理でしょう」って、当初は誰も信用しなかったのです。まさかできるとは思わなかった。

ソウルの大渋滞と交通の無秩序さは、日本人もびっくりのひどいものでした。万年渋滞と譲らない精神のせいで、バスがバス停に止まれない。韓国のメインストリートは片側4車線なんていうのもザラですから、混んでいるとバスが脇に寄れないのです。バス停にいる人がバスに乗れない。そういっためちゃくちゃな交通秩序を李明博市長は「えい！」と一気に直してしまった。壮大な手品を見せられた思いでした。

米国産牛肉問題、日韓関係の悪化

ただ、それでいい気になってしまったのか、大統領になってからの仕事は冴えなかったですね。いまひとつ運も悪かったということもあります。しょっぱな試練は「米国産牛肉の輸入反対運動」でしたが、それは前政権の時に約束したものでした。ただ、この反対運動をきっかけに韓国社会の分裂は、目に見える形で深まりました。目に見える形というのは、私の目にも見えるほど身近だったわけで、それまでは世代的に革新的な人が多かった友人たちの中でも、いろいろ立場の違いが出てきた。たとえば食堂をやっている友人などは、一刻も早く「安くて美味しいアメリカ産牛肉がほしい」というわけです。国産牛肉は高すぎて、もう手が届かなくなっていました。

また日韓関係もそうです。皆さん、記憶されているのは、2012年の竹島上陸などでしょうか。そのころから日本では、「最悪の日韓関係」ということが頻繁に言われるようになりました。

躍進する韓国経済

李明博大統領はバツとしなかったのですが、この時期の韓国経済には躍動感がありました。すでにITは日本より進んでいたし、その他の分野でも日本を追い抜こうとしていた。決定的だったのは、サムスンのギャラクシーだと思います。

私たちが初めてスマホを手にした時は 아이폰でした。それが徐々にギャラクシーに変わっていきました。2010年のSシリーズあたりからは、もう全く遜色がない。日本のメーカーがスマホで遅れをとった頃、海外の電化製品もどんどんサムスンやLGのものに変わっていきました。私のパソコンなどもそれまで日本に行ったらソニーや富士通のものを買ってきていたのが、しばらくしてサムスン製に変わりました。

それまで米国や日本に憧れをもっていた韓国の人々が、国産品を評価するようになったのは大きな変化です。牛肉も電化製品も韓国製が一番。韓国経済は発展し、人々の生活も豊かになりました。

たとえば一人当たりのGDPも、盧武鉉時代から李明博時代に飛躍的に上がります。2008年はリーマンショックの年で、わずかに落ち込んでいるのですが、他の国に比べたら韓国は優等生。私がある頃に日本に出した本のタイトルは『もう日本を気にしなくなった韓国』（洋泉社、2006年）です。

6. 朴槿恵政権から文在寅政権へ

朴槿恵大統領			私				
年		GDP/1人	年	月	職	仕事内容	住まい
2014年	セウォル号事件	2万7000ドル				企画・翻訳会社	延禧洞の3LDK
2015年	慰安婦合意	↓				旅行ガイドブック	
2016年	ろうそくデモ	2万9000ドル				機内誌翻訳等	
2017年	大統領弾劾、逮捕					『論座』連載	
文在寅大統領			私				
年		GDP/1人	年	月	職	仕事内容	住まい
2018年	南北首脳会談	3万2000ドル	2017年	4月		『中くらいの友だち』創刊	
2019年	ノー・ジャパン運動	↓	2020年			パンデミックで仕事なくなる	
2020年	新型コロナパンデミック	3万5000ドル					
	李明博逮捕と朴槿恵恩赦						

朴槿恵時代と文在寅時代ですが、この辺からは割と最近ですので、皆さん記憶がおりかと思いますが、SNS全盛時代となって発信者も増えました。日本でもリアルタイムで情報が共有されていたと思うので、あえて私が申し上げることもないかと思いますが。

一つだけ、朴槿恵大統領について言えば、私は当初から不思議でたまりませんでした。セウォル号の悲劇は言うまでもないのですが、それとは別に当初は「中国寄り」と言われて、プーチンや習近平と一緒に天安門のお立ち台の上に上ってしまったり。安倍さんのことを露骨なまでに無視していたのが、一転して「慰安婦合意」とか。突飛な行動も多かったのですが、後のほうになって「やはり背後に操っている人間がいる」と、一気に弾劾にまで追い込まれていく。

実は私だけでなく、韓国のメディア関係者も気づいていたのです。黒幕がいることを知っていた。でも、なぜかそれを言わなかった。「機が熟すのを待っていた」と言われればそうなのですが、ここらへんは今も不思議に思っています。なぜ韓国のメディアは知っていたのに言わなかったのだろうか。

その頃の私自身の暮らしといえば、相変わらずいろいろな仕事をやっていたのですが、2017年に同志を募って『中くらいの友だち』という同人雑誌を日本で創刊しました。その頃は「最悪の日韓関係」という言葉が何度も更新されつつ、文在寅大統領の時代になると「嫌韓本ブーム」のようなものが日本で起こりました。本屋にそういうものばかり並んでいて。そこに風穴を開けたいというのが、『中くらいの友だち』創刊の動機でした。

その後、2019年ぐらいから、韓国の小説とかエッセーなどがたくさん出て、2020年以降はパンデミック下で韓国ドラマも大ブームに。おかげで嫌韓本はあまり目立たなくなりました。日本社会も静かに変化していたのです。韓国社会のようにダイナミックではないけど、日本なりに少しずつ変わっていった。

最後は少し端折ってしまいましたが、やはり90年代と2000年代では私自身の暮らしもかなり違ってきます。私が大変だった90年代というのは、実は韓国社会も相当大変だった。2000年代になり韓国社会が安定していく中で、私の暮らしも少し落ち着いていった。自分が苦しい時は、つい努力が足りないとか、何かが間違っていると自己責任モードになるのですが、こうして俯瞰してみると、やはり人間は社会的な動物であり、社

会としっかりつながっているのだなと感じます。激動する韓国社会の片隅で、私も一緒に転がっていた。少し時間をオーバーになりましたが、終わります。

司会：すみません。最後、少しせつつかせてしまった形で終わってしまいましたが、私も90年代から韓国にいましたので、すごく懐かしいですし、こうやってご自身の経験と合わせてご説明していただけるのは、すごく身近な韓国というようなものを感じたのではないかと思います。伊東先生、本当にありがとうございました。

第2部 鼎談・質疑応答

伊東順子（作家・翻訳家）

出水薫（韓国研究センター 副センター長）

緒方義広（福岡大学 人文学部東アジア地域言語学科 准教授）

出水：では、休憩が終わりましたので、ここからはまず鼎談形式で、3人でお話した上で、皆さんとあまり格式張らずに、自由にやりとりできるように移行したいと思っています。私は九州大学の韓国研究センターで副センター長をしています、出水と申します。今日の共催団体の九州韓国研究者フォーラムの代表でもあります。この第2部は私が司会をしつつ、やっていきたいと思っています。緒方先生、自己紹介をお願いします。

緒方：福岡大学の緒方と申します。私も比較的長く、一昨年まで19年、韓国に住んでいて、大学院、大使館で勤務したり、大学で教えたりということで、福岡に来てまだ2年目ということですがけれども、今日是一緒にお話しさせていただこうと思います。よろしくお願いします。

出水：まず冒頭のお話にあったように、韓国研究センターの研究企画として「ポスト1965年」というのが、今年度から3年間おこなわれます。ご存じのように日韓基本条約が1965年に結ばれるわけです。この条約自体は今日も生きている条約で、日韓の政府間関係、外交関係においては、この65年条約を基盤とした関係は何ら変化していません。ただ、今日の伊東さんのお話を伺ってお分かりだと思いますけれども、日韓の関係というのは実質的に、まったく変わってしまったわけですね。私は1980年代に高校・大学を過ごした世代で、ほぼ伊東さんと同じ世代に属するのですが、要するに今の大学生の皆さんには考えることができないような状態だったと思います。

私たちが高校や大学の時代、日本語の世界で韓国を論じる場合は、それはもう決定的に政治・外交・歴史の話でしかない。ところが今の20代の学生の皆さんはむしろ、韓国の話題といった時には映画であり、音楽であり、ファッションであるという話になると思います。われわれの世代からすると、そんなものが日韓の間で話題になるということは想定もし得なかったわけですね。そもそも日韓関係だけでなく、韓国内が劇的に変わったわけですね。もちろん日本社会も、考えてみればまだ洋服が日常の服になって200年たっていない。厳密に言うと1950年代でも、当時の写真を見れば分かりますが、女性は着物を着ていたりするし、既製服を着たりはしていませんでした。しかし韓国は日本以上に非常に短期間で、生きている間に本当に世の中が変わってしまうような変化を、今日のお話を伺っているだけでも想像がつくと思いますが、経たわけですね。

ポスト65年プロジェクトというのは、そういった韓国側の社会や経済の変化も含めて、日韓関係が、いわゆる垂直的な、ある種、偏った力関係から、水平的で対等な関係に変わってきたということを多方面から検証しようというプロジェクトなので、今年度は伊東さんのように、フリーライターとして実際に韓国にお住まいになって、肌身で生活の変化を感じた方のお話の機会をこのように設けたわけですね。先ほど自己紹介をしてくださいましたが、緒方先生も19年間、韓国に滞在された。私はわずか3年間ですがけれども、94年から97年まで釜山で仕事をしていました。それぞれに韓国の変化を体験し実感してきたと思います。逆に言うと、今の日本における韓国の受け取り方というのは、非常に偏っていて、あたかも現在のような状態が20年30年も前からあったのではないかという錯覚をもたらしかねない状況になっているわけですね。そういった意

味では、いかに韓国の変化が激しく、どれほど変わったのかということ、今日、できればやりとりしながら、具体的に見ていきたいと思います。

まず伊東さんに、少し時間が短かったので、もう少し何か付け加えることが、今のような観点からあれば。

伊東：言おうと思って言えなかったことを2点だけ言いますね。私が暮らした30年の中でいつが一番よかったかということです。お話しした以外でもプライベートの人間関係や家族関係などいろいろあって大変だったのですが、それを別にして「韓国はいい国だな」と心から思ったのは、盧武鉉（ノ・ムヒョン）政権の真ん中ごろで、李明博（イ・ミョンバク）市長の時代です。

大統領が盧武鉉（2003年～8年）で、ソウル市長が李明博（2002年～07年）。革新系の大統領と保守系のソウル市長が両輪になって、それぞれの持ち味で社会を前に進めていく。フランスなんかもそうだと聞きました。大統領がミッテランで、パリ市長がシラクの時代とか、保革が分かれたほうがよかったと。それを盧武鉉・李明博時代に強く感じました。ただ、そういうシーンが長く続かなかったのは残念です。盧武鉉大統領も李明博市長も、その後、とても気の毒なことになってしまっ。

蔡鉉國という韓国の民主化運動を財政的に支えた人が以前、「韓国はトカゲの尻尾切りではなくて、頭切りだ」という言い方をされました。日本はトカゲの尻尾切り。今回の自民党の件でも秘書ばかりが切られていくのですが、韓国は大統領を切っていく。トカゲの頭を切ってしまうというのです。それが正しいかどうかはともかくとして、だとしたら私は李明博も盧武鉉も、尻尾でもなく胴体の辺りにいてほしかった。そしたら、彼ら2人は今も元気に、素晴らしい仕事を続けてくれたのではないかと思います。それが1点目です。

もう1つ、韓国関係の仕事をしたいという若い皆さんにお話しているのは、当たり前のことですが、どういう関わり方をするかは人によって様々だということです。大学教授になられる方もいるし、公務員になられる方もいる。それとは別に、私のような自由な関わり方もできますよと。ただし、私には一つ、生きるうえでのポリシーのようなものがあります。それは「嫌なことはしない」ということ。好きなことだけをしようとも思わないし、ものすごく出世しよう、上昇しようということもあまり考えたことはない。興味が無い。でも、自分の嫌なことは絶対にしない。努力はするけれども、我慢はしない。

韓国から日本を見ていて思ったのは、日本人は本当に我慢強い。避難所、会社、集団の中で我慢する。韓国人も集団の中では日本人以上に我慢はします。同調圧力は日本以上に強いですから。でも離脱もする。移民もする。

私にとって我慢しないということは、離脱するということです。そもそも韓国に行ったことが離脱でした。それは物理的に組織から抜けるということもあるし、心理的に集団から離脱するという意味もあります。孤立を恐れない。

ただ上昇志向がなかったことは反省点です。大学院とか考えもしなかったのですが、少し後悔しています。今の時代、専門的な研究者の役割は本当に重要だと思います。さまざまなフェイクと戦わなければいけないから。エコチェンバー、陰謀論やフェイク、そこにぶつけられるファクトを提供すること。それはとても意味のあることだと思っています。

出水：ありがとうございました。それで、最後のほうの駆け足だった部分は、この会場におられる皆さんは、20代の若い方はともかく、比較的、同時代的に経験なさっているので、もう一度、90年から80年代の末までさかのぼって少し確認したいことがあります。私は最近、韓国の映画やドラマということで、80年代とある程度、距離を置いて眺め直したり、97年のIMF危機をドラマの中に織り込んで、その時代にどのように人々

が衝撃を受けたのかということを取り上げたりするようなものが増えているのではないかという印象を持っています。緒方先生はいつからソウルにおられたのですか。

緒方：2003年の夏からですね。

出水：そうすると、今日の伊東さんの話の中で言うと、日韓ワールドカップが共催されて、冬ソナブームに入る直前くらいですね。

緒方：冬ソナと入れ違いくらいですね。

出水：だから、それまでの日本の文化開放によって、韓国側が急速に日本に対しての認識を改めたり、文化に対して理解を深めたりしていたのが、一種、逆転を起こして、その後の日本側の韓国への関心が高まり、理解を深まっていく時期の境目辺り、韓国からそういった日本の状況を眺めていた状態だと。

緒方：そうですね。

出水：同じように長期にお住まいになった観点から、伊東さんの今日のお話の中でさらに尋ねてみたい、あるいは補足したいということがあれば、よろしくお願いします。

緒方：補足はあまりないですし、共感するようなところと、私も19年と言いながらも、それ以前のことはやはり経験していないので、そういったところは想像していたようなことが具体的にお話を伺えてよかったなと思います。私も伊東さんのことは『病としての韓国ナショナリズム』というご著書を昔、読ませていただいて初めて存じ上げたのですが、日本では一面的にしか語られない、依然としてそういうところを感じていますがけれども、韓国に行った当時にもそういうのを感じていた中で、そのご著書を通して、やはり現地に根ざした視点の重要さのようなことを感じたのを覚えています。

私もそういう観点で、韓国で生活していて、先ほどの、努力はするけれども嫌なことはしない、上昇志向は特にないというようなことは、私も同じような感じです。私は脱サラをして韓国留学を決めたのですが、その時に思ったのは、北朝鮮のことが特にそうだったのですが、日本のワイドショーなどで一面的にひどく語られる状況を見て、自分の周囲には在日コリアンの友人がたくさんいる中で、日本における朝鮮半島への視点が何かおかしいなというのを、現地に行って自分の実感として見て知りたいというところで行ったので、そういうところは恐らく伊東さんが今日、語っていただいたことと同じような感覚を私も感じたところですよ。

質問というところでいくと、私の場合はロストジェネレーションといわれる世代で、比較的、海外に軽く行ってしまうような人が周りにも多かったのですが、また少し違う時代に韓国に行かれたのだと思うので、その一番大きかったきっかけや、しかもその後、ずっと関わってこられて、恐らくいろいろと嫌だと思ったり、日本に帰りたいという感覚があったり、なかったりという、その辺は恐らく皆さん知りたいだろうと思いますし、私も気になるので、お聞かせいただけるとうれしいなと思います。

伊東：韓国に行ったのは、子どもの時から韓国が好きだったからです。小学校の頃から、理由は分らないです。韓国が好きだというよりも、私が好きになったものが全部、韓国と関係していた。これは本当に不思議なのですが、例えば歌手やプロ野球の選手、お相撲取り、プロレスラー。例えば大木金太郎が好きだった

り、長州力が好きだったり、張本が好きだったり、いろいろな好きな人がいたのですが、なぜか韓国人なのです。私がおいしいと思ったものも、韓国系のもの。キムチなんかも、我が家の食卓にはなかったのですが、祖母が好きで時々買っていた。だから祖母の家に行くと、私だけがそれを食べていた。そういう感じで、なぜか韓国のことがずっと好きで、好きになる人も韓国人が多かった。ところが、その頃の日本は韓国人・朝鮮人に対する差別が激しくて、私は好きなのに、みんなは差別したり、嫌ったり、あまり認めないということがあって、それがものすごく不思議だった、私は韓国人になりたいのに。それで高校の時からずっと韓国関係の本を読んでいて、大学に入ったら朝鮮語を勉強したいとずっと思っていて。

ただ、その頃は韓国関係の人のところに近づくと、どこへ行っても必ず政治的な人たちなのです。そういうところに行って韓国が好きだと言うと、まず「日本人として自己反省しようね」と言われる。あるいは「日本人に何が分かるのか」ということも言われた。確かに住まなきゃわからないかも。ちょうど私が韓国に行った頃はバブルで、日本の女性たちが一番海外に出た時代です。その頃に海外に出て、ずっと住んでいる友人たちが結構います。その中で私は韓国を選んだ。もちろん周りからは不思議がられましたが。「なんで韓国？」と。韓国人にも言われました。「我が国に何かありますか？」と。

出水：たぶん今のお話を伺っていて、ほぼ同世代なので、今、何げなくキムチが好きでという話があったのですが、たぶんキムチという呼び方もそんなにポピュラーではなくて。

伊東：朝鮮漬けと呼んでいましたね。

出水：そうですね。私の祖父が植民地朝鮮の日本人の郵便局長として赴任して、私の父が生まれ、私の父は釜山で育ったのです。要するに植民地支配をする側の一員として。ただ彼にとっては「故郷」だったので、私の小さい頃は朝鮮漬けが冷蔵庫の中にあるのが普通だった。ただ、要するにキムチという呼び方、片仮名のキムチなるものがここまで定着するというのは、ですから、私のような世代からすると信じ難いところがある。

そして、今、最後のほうに伊東さんがおっしゃったこともそうですけれども、80年代に高校や大学に行った世代にとって、韓国についての情報が最も出てくる雑誌は何かというと、例えば『世界』や『朝日ジャーナル』。そうすると先ほど申し上げたように、政治や外交や歴史の話でしか出てこない。かろうじて、例えば一度、SNS上で伊東さんと話が盛り上がったのですが、光州事件に関してのプロテストソングを在日のミュージシャンが歌うということについて、日本のロック系の雑誌が取り上げたり、全国ツアーを有志が手弁当でやったりというような、そういう時代だったわけです。だから、本当に半世紀もたたない前のことだけれども、全く異世界に来ているような状態になっているというのはあると思いますね。

先ほどお名前が出てきましたけれども、やはりある段階までは完全に、芸能界であろうと、スポーツ界であろうと、在日であるということを表沙汰にしないという暗黙のルールが恐らくあって、それは、しかし、あの人は在日であるというのがささやかれるような状態でしかなかった。しかし、今は明らかにもう本名で、例えば声優や芸能活動をする人たちも出てきていますので、これもまた80年代に10～20代だった伊東さんや私の世代からすると隔世の感があるというか、あり得ないような変化ですね。しかし他方で、そのこと自体が恐らく今の30代以下の人たちにとっては、あり得ない過去だったのではないかという、このギャップをどう埋めるのかという話が少しでも今日はできればと思っています。

今日のお話の中で、伊東さんは大統領ごとに区切ってご説明になったのですが、私は政治を研究していますけれども、政治の研究者からすると、大統領によって劇的に政策が変化するというのは分かるのですが、

他方で、今日のお話の中で非常に皆さんが興味を引かれて面白かったのではないかと思いますのは、やはり伊東さんが常に、本をお書きになる時もそうですけれども、やはり生活している実感の中から政治を語る、政治を政治として語るというよりは、生活している中で感じられる政治の見え方を語られることが多いと思います。それが私にとって伊東さんの本が非常に参考になる点なのですが、それとの関連で言うと、大統領が変わったから政府の政策が変わるというのは分かりますが、今日、お話になったような韓国社会の変化が大統領を変えたり、大統領候補を変えたり、大統領の選び方を変えたりするという観点では何かありますか。もちろん盧武鉉大統領の時に、ノサモの話でネットのことについて言及されましたから、何かそういったことについて、少し補足を。

伊東：先生のほうがご専門ですけれども、民主化以降、韓国の大統領選挙というのはいつも接戦です。例外はわずかで、たとえば文在寅（ムン・ジェイン）大統領は圧勝と言ってよかった。その時に朝日新聞のインタビューで、「今回の大統領選挙で何を思い出したか、どの大統領を思い出したか」と聞かれたのです。おそらく盧武鉉や金大中（キム・デジュン）という名前を予想されたのでしょうか。私が「李明博」と言ったら、すごく驚かれてしまって。でも李明博も圧勝だったのです。

圧勝する時には明確な理由があります。李明博の時は2代続いた革新系大統領への決別、文在寅の時は保守系への決別。そこは明確でした。ところが接戦になる時は、そこまで人々の思いが熟成しているようには感じられません。それよりも実際の選挙運動が始まってから、人々が無意識にバランスを求めていくような感じ。どちらかに偏らないように、絶妙なバランスに動く。その結果としての見事な接戦となる。これも韓国式の民主主義の形のような気がします。

韓国に住んでいると、大統領の存在が大きいわけです。だから、何か思い出す時も、あの時の大統領は誰だったかということが、生活実感の中から出てくる。日本の人はそういうことを思い出すのでしょうか？私は日本に30年もいなかったのだから分かりませんが、あれは安倍さんの時だった、あれは小泉さんの時だったという、日本でも印象の強い人の場合はそうなのかもしれません。でも、韓国の場合は非常にはっきりしている。ただ同じ大統領の時代でも、人によって印象は違うでしょう。どういうポジションにいて、どういう生活をしていたかによって思い出すことはいろいろだと思う。ということで、質問は何でしたっけ。

出水：社会の変化が、例えば大統領候補の変化などを。

伊東：候補者ですね。たとえば盧武鉉の時は、彼も絶対に落ちるといわれていましたよね。でも当選したというのは、やはり見えないところで、何かが熟成していたのでしょうか。専門家もメディアもそれを察知できなかった。

出水：盧武鉉さんの辺りで全く、確かに変わりましたよね。そこまで言うと、今日もご紹介にあったように、例えば盧泰愚（ノ・テウ）に対して金泳三（キム・ヨンサム）・金大中が民主化の闘士としてやっていて、それぞれすでに長い政治的キャリアがあって、知名度も高かったと。ところが、盧武鉉は、要するに政治的経歴としてもそれほどいろいろな要職をやったわけではないと。まさに泡沫（ほうまつ）候補であって、注目されなかったのが、ネット上で、ある種の愚直なまでの誠実さが若い層に受けて拡散されて、あれよあれよという間に野党の候補になり、そして本選でも勝ってしまった。そういった意味では、おっしゃるように、盧武鉉の辺りが社会の変化を反映した大統領の選び方になったのではないかと思います。

今、伊東さんがおっしゃった、文在寅が当選した時と李明博が当選した時が似ているというのは、政治研

究者からすると、少し補足すると、どちらもその大統領選挙の前に旧与党がまさに分裂したり、崩壊したり、前の大統領の終わり方があまりにもひどすぎて大差がつくという状態だったのが、李明博と文在寅が当選した時の在り方だったわけですね。

伊東：李明博の前は盧武鉉ですね。

出水：そうです。末期で、だから、そもそも盧武鉉が。

伊東：盧武鉉の末期と朴槿恵（パク・クネ）の末期で、同じようにひどかったということになるわけですね。

出水：基本的には党内での争い方ですね。そもそも盧武鉉自身が大統領に、最初に当選した時、与党自体が少数与党に議会内ではなっているというようなことも含めて、与党の混乱と最終的な評価という問題では重なるところがあります。

緒方：大差がついたというのは、前の政権に対するアンチというのがすごく強く社会で共感されたのもあると思います。盧武鉉の時は経済政策というところでたぶん多くの国民が、生活が苦しいところを李明博に期待するという、やはりソウル市長時代の、先ほどのお話にあったように、素晴らしいという認識がすごく先行したようなところがあったのかなと思います。だから、そういう意味で言うと、李明博は期待どおりのことをやったのだらうと思いますが、国民はその後、李明博たたきになるわけです。結局、李明博は格差をもっと拡大して国として経済発展するということを最初から言っていたのだと思いますが、それで期待が裏切られたというふうに感じてしまったのは、少し残念といえば残念なのかなと。

その次に、今度は文在寅が圧倒的に当選したというのも、結局、文在寅がどうというよりも、前の政権が不公正だったというところで、公正な世の中をつくらせてくれることを期待したのだらうと思います。でも、少し違うかなと思うのは、結局、文在寅はそれを実現できなかったとは言っても、それは文在寅一人の問題ではないと思うんです。与党も結局、公正でないということを見せてしまって、結局、既得権というのが、野党というか、保守だけの問題ではなかったということを見せてしまったというところで、また混沌とした次の大統領選挙になったのかなと思います。

伊東：でも、私は不思議に思うのですが、韓国は、私が暮らした30年間で1人当たりのGDPというか、暮らしは右肩上がりにドーンと、ずっとよくなっているのです。なぜみんな政権末期になると、「経済が混乱した」、「不景気だ」と言って大統領のせいにするのかなと。日本なんてずっと停滞していて、それでもみんな我慢しているのに、韓国はこれほどよくなっているのに、どうしてでしょうね？

緒方：相対的なものなのではないでしょうか。自分の生活がやはり、よくなっている人が目に見える中で、自分はそうならないという。

伊東：横を見ているわけですね。自分よりもっとよくなっている人がいて、自分はそれに少し足りないという、あれはそういう意識ですかね？

緒方：それがたぶん盧武鉉の時には激しかったのかなと思います。

伊東：私も韓国人の一部のようなものですが、先ほど見てもらったように、下宿の相部屋から、最後は3LDKまで、住居一つとっても非常に右肩上がりで発展してきました。韓国の人はそれ以上に右肩上がりで、住むところも何回も買い替えを繰り返して、最終的にはタワマンに住んで、表面的にというか、外観的に見たら生活はとてもよくなっているわけです。経済数値的にもそうですね。ところが、ずっと経済政策の失敗だ、不動産政策の失敗だといって、時の大統領は批判にさらされてきた。やはり韓国人たちの、この要求の高さというのは、よくも悪くもすごいなと私は素直に思いますね。

緒方：盧武鉉の頃はまだ、われわれから見ると先進国にもう韓国はなっていると思ったのに、みんな自分たちは先進国ではないということをすごく言っていた時代だったと思います。だから、そういうところが出てきたのかなというのはすごく当時は思いました。

出水：政治学者が2人介入したので、少し政治に偏り過ぎたと思いますが、やはり今日のお話を伺っていて私自身が興味深かったのは、韓国ドラマの素材そのものの人生を生きてきたのかなという感覚がして。例えば半地下は『パラサイト』のおかげですごく有名になって、しかし、IMFで会社が駄目になって、チョンセ詐欺には遭うし、手抜き工事の犠牲にはなるし、本当に韓国の映画やドラマの素材として必ず出てきて、主人公たちが奮起、一念発起してヒーローに変わっていくための、通過儀礼的に取り扱われる素材をすべて経験なさっているということ自体がまず驚きでした。

今日、ご来場の皆さんもいろいろな観点から足をお運びくださったと思いますが、そろそろあまり堅く形式張らずに、ご質問があればお受けしたいと思っています。まず今日の伊東さんの話に触発されて、こういうことをさらに聞いてみたいということがあれば、どなたからでも結構ですが、挙手していただければ。

伊東：あと一つ言えば、ただ、私のような経験は韓国人なら誰もがしているようなもので、会社が倒産したり、誰かが夜逃げしたり、友達にお金を貸したらその友達が消えたり。さらに私はしなかったのですが、コインや株などに投資もドカンとして勝ったり負けたり。日本にもそういうことをやっている人はいるでしょうけど、あまり身近な話ではありません。これに子どもの入試問題が加わると、さらに韓国では大変なことになるのですが。

出水：少し口火を切っていただくために、私のほうから。私が知っている範囲内だと、この会場に10代の方がお1人おられて、たぶん10代の方から見ている韓国のイメージと、今日の伊東さんの80年代というか、実生活としては90年代から説き起こすような話というのは、なかなか新鮮だったのではないかと思います。感想や質問があれば、それも含めてお願いしたいと思います。

[質問1]：やはり最初に印象に感じたのは、自分の周りの中で韓国のお話をすると、ほとんどアイドルの話、あるいは映画やドラマで、どちらかというとカルチャーのイメージのほうが大きくて、政治の話は全く、思い返してみても、友達としたことはありません。どちらかというと、韓国のことが好きということと韓国の政治が好きというのはイコールではないし、逆に韓国の政治のことを言うと、タブーのように感じてしまうこともあるのですが、そこに先生方との韓国に対しての認識の違いがあるのではないかと思います。今回の講演の中で感じました。

質問が一点あって、ご著書を読ませていただいたのですが、韓国の歴代の大統領で自分はクリスチャンだと公表している方が何人かいるというのを見た時に、自分が日本の首相を思い返した時に、自分は何教です

ということを公表している人は思い付かなくて、逆に日本の政治と宗教が結び付くことはあまりよくないイメージがあります。神社に参拝したり、統一教会だったり。韓国の人は大統領が自分の信仰している宗教を公表していることに対して、何か不満というか、思うことはないのかなというのはこの本を読んで思いました。

伊東：投票行動と宗教が直接結び付くということは、ごく一部に過ぎないのではないかと思います。それとは別に、韓国では、政治家にしろ誰にしろ、学校の先生でも隣のおばさんでも、特定の信仰を持っているということは、それほど驚くようなことではありません。だから、クリスチャンが人口の30%いたり、仏教徒が何%いたりする。そういう人たちは毎週、教会やお寺に行くなど、きちんとした宗教活動をしているわけですね。中には勧誘する人もいますが、それも特別なことではありません。

だから国民としては、大統領に宗教があるのも普通だし、ないのも普通。拙著にも少し書きましたが、韓国政府としても自国の宗教事情について、「非常に信教の自由が保障されて、いろいろな宗教が共存している、世界でも希有な国」として評価しているようです。国民も宗教の自由があることを誇りに思っているし、「誰が何を信じるのも自由」というコンセンサスは共有されていると思います。日本のようにあえてタブーにして、政治家が宗教のことを言わないほうがよい、ということはないと思いますね。どうですか？

緒方：そうだと思います。逆に日本が普通ではないのだろうと。日本は逆に、公明党が与党にいたりして、実は宗教と政治が当然のように同じところに共存しているけれども、それをあえて言わないということが普通ではないような気がします。だから、韓国には宗教が普通にあるので、大統領がクリスチャンであるというのも、そうだねというだけで、それだからどうという結び付け方はしないということなのだろうと思います。

もし付け加えるとすれば、韓国は歴史的に、キリスト教が民主化の中で役割を果たしてきたり、独立運動もそうですけれども、あるいは韓国社会の福祉の部分で足りない部分を宗教界が穴埋めしていくようなところがあったり、そういう社会的な役割をかなりずっと果たしてきているので、当然ながらそういった社会的な意味を宗教が持つことに対しても違和感がないというのはたぶんあるのかなと思います。

伊東：一般的にも宗教指導者は尊敬されていますよね？

出水：さかのぼれば、それこそ三一独立運動の宣言文は、宗教者の集団によって起草され、署名されたことになっていますよね。あそこに名前が挙がっているのは全員、宗教関係者です。そういうことも含めて、独立運動から民主化まで、やはり社会的なある種の不正を正したりする拠点として宗教施設を提供してきたという歴史があるが故の、そういった評価もあるのではないかという気がします。

普通にわれわれが韓国を旅行して、韓国のどんな町の夜景を見ても、なぜあれほど派手な十字架があるのだろうというくらい、ネオンサインの十字架が至るところに建っていますよね。去年に話題になった『ムービング』というドラマの中でも、一つのエピソードとして、教会の十字架を目指していけば家に帰れると言われたけれども、気が付いたらやたら十字架があって、どの十字架を目指して行けばよいのか分からなくなるというシーンがありました。私が釜山にいる時には喫茶店と同じだけ教会があるということを言う人もいたくらい、日常的に宗教施設があるという文化があると思います。そこは結構、日韓の間で社会的な雰囲気の違いのところ、確かに一つかもしれないですね。

伊東：ただ、一般的には韓国でも宗教人口は減っています。若い人が教会やお寺に行かなくなっていて、だんだん先細りしていくのではないかと。日本はもともと少ないところに、さらに教会も行かなくなっても大変ですけども、韓国もだんだん若い人が行かなくなっている。逆に新興宗教のようなものに若者がはまったり、福音派の保守系キリスト団体が過激化するなどの問題もあります。ただ、宗教を持つことは一般的なことでと思います。持たないのも一般的です。

出水：むちゃ振りをして、申し訳ありません。せっかく糸口がお1人からあったのですが、ほかに何かご質問があればお願いします。

【質問2】：2点、質問させてもらいたいのですが、一つは、ご講演の中で、韓国大統領選挙があると、政治的にその都度、刷新されるということで、連続性のない社会ということをお話しされたのが印象的で、逆にそうしたダイナミズムがある一方で、連続しているものがあるとすればどういうものがあるのかなと。

伊東：連続性というか、大統領選は5年で切れてしまうので、そこは連続していないのですが、国民の希望や要求、こうなりたいという夢、国民がこういう社会でありたいという、それはものすごく連続しているわけです。やはりフェアな社会がよい、あるいは少しでも子どもが豊かになってほしいといったような太い連続があります。また、大統領が変わっても官僚、公務員の人たちは連続しているわけです。この辺りの人たちが社会をきちんと支えている。例えば韓国人はすごく教育熱心だったり、働き者だったり、勤勉だったり、真面目で一生懸命な人が多い。そういう人たちが成功する社会が理想であるというような太い部分が、非常にしっかりしているわけです。非常に正しい理想をきちんと持っているのも、そのあたりが強いのではないかと思います。

【質問3】：もう一点、すみません、私は去年の夏に2カ月、ソウル大学に行っていたのですが、現地の大学生や、あるいは20～30代くらいの世代の人たちと話していると、今までもそうだといわれていたのですが、印象として以前よりも、日本についてもうそこまで、例えば日本のことをあまり意識していなかったり、今までは例えば競争相手としての日本や、歴史問題の相手としての日本や、少なからず日本の存在感のようなものは頭のどこかにあったのが、もう私たちの世代だとあまりそういうことはないということを話す人がすごく多かったのが印象深かったです。30年の韓国生活をされている中で、韓国人の人たちが日本を見る見方のようなものを、特にどういう点で感じておられるのかなというのを伺いたいです。

伊東：基本的には変わらないというか、1990年代から「今の若い人の日本に対しての意識はフェアで、こだわりはない」とずっと言われてきています。その若い人が年を取ると、「今の若い人は」という話がまた出てくる。「もう何年かしたら日韓関係は変わる、若い人の時代になったら昔のことにこだわらなくなるだろう」と繰り返し言われてきました。逆に専門家の先生方に聞きたいくらいです。たとえば金大中大統領の時代、日本文化開放の時にも、「もう今の若い人たちは、子どもの頃から日本のアニメや漫画を読んでいるから、前の世代とは違う」といわれていましたよね。「若い世代にはこだわりのない」と。そこらへんは昔も今もあまり変わらないような気がするのですが。

伊東：「若い世代はこだわりのないだろう」という言い方は同じなのですが、知識の量が全然違いますよね。昔と今とでは知識の量が違って、情報量が全然違う。私たちも若かった頃には「あなたたちの世

代はもう大丈夫だからね」とよく言われました。それを言ってくれた時の、韓国の高齢者たちは日帝時代の経験があったので、実際の日本をよく知っていた。日本の本や雑誌を読まれる方も多くて、かなり正しい知識を持っていた。ところがその下の世代、解放後に生まれた人々の日本に対する認識というのは、ここで言ったら驚かれるような荒唐無稽なものがいっぱいあった。たとえば韓国では「日本人は歯並びが悪い」という共通認識があったのですが、その先がすごかった。「なぜ歯並びが悪いかといえば、日本人は近親相姦するからだ」とか。「え、近親相姦？」とびっくりしたのですが、そんなことが本にも書いてあったのです。どうということかという、1990年代の韓国には「同姓同本の結婚禁止」という法律があって、これは同じ苗字で同じ先祖の人同士は結婚してはいけないというものです。日本にはそういうルールもないし、法律的にはいとも同士でも結婚できる。そういうことが、韓国の人たちにとっては野蛮きわまりなかったわけです。90年代初頭の韓国には、そういったトンデモ系の日本人論がけっこうありましたね。それを一つ一つ訂正していると大げんかになってしまうようなこともありました。

そういう荒唐無稽の間違った知識は、さすがに時間の経過でなくなっていったのですが、その次には偏った知識というものが出てくるわけです。間違った知識ではなくて、自分の見たいものしか見ない。これは韓国人に限らず、日本人も同じです。年を取れば取るほど自分の見たいものしか見ない。でも若い人たちは頭が柔軟です。特に今の子どもたちは自分と隣の人が考えていることが違うということも当たり前。みんなで一緒にテレビを見ていた時代ではないですから、それぞれがそれぞれの情報をみんな持っているわけですね。昔と今では情報量の違いは決定的だと思います。

間違っていた時代、偏っていた時代、自分が好きな情報を取れる時代。韓国の人たちも今は、自分が生きたい生き方を一人一人がばらばらに個人として考えていて、別にグループでまとまらなくても頭の中くらいは自由にさせろというような、今はそういう時代ですから、そこは全然違うと思います。

出水：少なくとも日本語を使う世界のほうが、最近韓国に対して過剰なこだわりを見せているのではないかと言いたくなる場面が増えている気もするわけですね。80年代に、例えば『朝日ジャーナル』や『世界』のような雑誌を介して韓国を見ていた人たちを取り巻く状況で言えば、すごく差別的な意識や偏見があるだけであって、韓国自体に対してそもそも関心を寄せていなかった。ところが、この20年くらいは日本側が常に、韓国が日本をどのように見ているのか、日本に対してどのように関心を払っているのか、ということに注意を払うようになった。

例えば、伊東さんのお仕事で非常に重要だと思う『中くらいの友だち』を創刊された、あの時の嫌韓ブームも、嫌韓であるにせよ、韓国への強い関心の一つの表れであることは間違いありません。つまり、無視することができない状態にあるという意味では、非常に日本側のゆがんだ韓国への関心が高まった時期だったのではないかと思います。韓国内にも濃淡があるし、日本側にも嫌韓派だけではなくて、多様な関心があるような状態になったという意味では、ベタッと同じような方向に向いているということで、双方ともなくなっているというふうに理解したほうが、すんなりと現状を直視できるのではないかと思いますというのが私の印象です。

緒方：そういう意味で、最近、韓国が日本を軽視しているというふうに日本でいわれたり、先ほど言っていたような、ソウル大学の学生たちが日本は普通の外国のうちの一つだよと言ったりするような、そういうことを取り上げて、日本で逆に過剰に認識されているようなところはあると思います。

先ほど伊東さんのお話の中で、朴槿恵大統領が中国に寄っているかのようにしていわれた時代は、韓国社会がやはり日本を軽視しているということで、すごく危機感のようなことが言われていました。その根拠

として、韓国社会で日本語が学ばれなくなってきたことだったり、東日本大震災の頃にも急激に日本に対する関心というか、日本語を勉強する人が減ったり、留学生が帰ってきたり、そういうようなことをもとに、日本が軽視されているという危機感のようなことがいわれたのですが、もともと日本語を教える人たちは韓国にすごく多いです。私もそういう仕事をしていましたが、日本語ネイティブで日本語を教えるという人たちが非常に多いから、日本語学習者が減るとそういう人たちの仕事がなくなっていくという危機感があって、それが日本大使館に直で伝わって、大変だという意識になっていて。

でも、北京オリンピックのブームで、中国がブームになったりもしたのですが、別に中国語と日本語の学習者数が逆転したりはしていません。単に日本語の学習者が減って、中国語の学習者が増えたけれども、圧倒的にずっと日本語学習者数は1位だし、コアな人たちはずっとやはりいて、日本に関心を持っていたり、日本のファンだったという人たちがいて。というのは変わっていないのに、日本語学習者が減っているという部分だけが独り歩きして、日本を軽視しているということが日本に伝わってきたというようなことがあるのかなと思います。最近はや時代も変わってきて、われわれの時代は安いから韓国の旅行に行っていたのが、今は安いから日本に旅行する韓国の人たちが増えているということも考えると、そういうところもひっくり返して考えないと、少しずれがあるのかなというのは感じますね。

伊東：私が2006年に出した本は、『もう日本を気にしなくなった韓国人』という本で、あの時も同じことがいわれたのですよね。私も感じたし。もうだいぶ前です。ちょうど李明博大統領の時代だったのかな。

『中くらいの友だち』のお話も出ましたが、あれもある意味「離脱」です。「嫌韓本ブーム」の出版業界から離脱する。あの頃は「嫌韓」的な原稿依頼があちこちからあって。もちろん嫌な仕事は絶対にしないのですが、わかりやすい離脱の方法を示したかった。

出水：少なくとも今日のお話のここまでのやりとりで、今のことに引き付けて考えないといけないのは、そもそも関心が多様になっていることは間違いなくあるわけですよね。繰り返しになって恐縮ですが、われわれの世代で言うと政治や外交や歴史しかなかったものが、今はカルチャーまで含めて、多様な関心の対象がある。対象が多様になれば。相互の関心のありようも一元的に増えたり減ったりするというよりは、双方ともいろいろな関心を持つ人々が増えてきていて、その意味においても水平的で、ある意味で対等になっているのではないかというのが私の印象です。ほかに皆さん方から何か質問はありますか。

[質問4]：本日はありがとうございました。自分は父が韓国人で、自分の経験でもすごく、父が韓国人と明かした時に「非国民」といわれていた時代から、今はうらやましいといわれる時代に、肌感覚としてもすごく変わってきたなというのも感じたのですが、そんなことを思い出しながらお話を聞かせていただきました。今、サブカルチャーがすごく日本で有名になってきて、政治的な問題とへの関心が薄くなってきているということも思っていて。そうやってきた時に、自分は日韓関係の修復という観点で考えて、世論から押し上げたほうがよいのか、上からしっかりと立てたほうがよいのかというのはすごく難しい問題だなと思っています。というのも、政府間でもなかなか合意がうまくいっていないし、でも、世論とってうまく形成されていないと思うのです。お聞きしたいのは、世論形成ということ考えた時に、日韓関係の修復というのがどのように向かっていくのか、あるいは向かっていったほうがいいなど、どのように日韓関係の修復について考えておられるのかなというのをお聞きしたいです。

伊東：お宅で政治的な話題が出るというのは、例えばどういう感じで出るのですか。日韓修復の問題ですか。

[質問4]: 例えばこの大統領はこういう政策をしたということだったり、父が韓国のきょうだいに電話したりすると、そういった時にもこの大統領選はこうだ、これが今、勝ちそうだという話題が出たり、日韓戦はただのスポーツというより政治的なものなので、そういうのも色濃く出ますし、そうやって自分は何げなく聞いていた大統領のことも今日はいろいろと話を聞けてすごく面白かったのですが。だから、これからどのように、サブカルチャーに頼って修復できるのだったらそれに越したことはないかもしれないですけども、そういうことはたぶんないと思うので、根本的に。先日、韓国人の留学生と竹島のことを話したのですが、そういう問題もすごく難しいと思うし、どういったことで道が開けていくのかということをお聞きしたいです。

伊東: うちも家庭内でいつも喧々諤々(けんけんがくがく)、どこもそうですよね。たまたま先週、東京で会った日本人の新聞記者の方が、彼も日韓夫婦なのですが、いつも夫婦で政治的な大論争になると言っていました。ところが、娘さんたちはそういうことに何も関心もなく、実に気楽に生きていると。私はこの娘さんたちが気楽に生きられるような関係が、とりあえず日韓にあってほしいと思うわけです。

そのためには、やはり政治的な原則論ではなく、私たちが幸せでいられることを優先したい。夫婦がご飯を食べながら対等に論争できて、そのことは気にせずに娘さんたちは学校に通える。政治的なことは気にせずに韓国に遊びに行けて、韓国の友だちが日本に来られて、竹島のことで論争になっても、結論が出ないまま一緒にカラオケに行って歌を歌えるような関係が、ここ10年、続いてくれたら、まずはそれでよいかなと。

世界のほかの国の状況を見ていると、本当に大変なことがいろいろと見えますよね。ウクライナの問題にしても、隣同士の国と本当に一つ間違えたら悲しいことになってしまうわけです。それは中国とか北朝鮮とか、あるいは台湾とか、東アジアでもいろいろあるわけです。そんな状況の中で、日本と韓国は今、一番よい関係かもしれない私は思っています。日本と韓国という国と国の関係というより、日本人と韓国人の関係です。サブカルチャーの楽しみも共有しながら、お互いに交換留学などで行ったり来たりしながら、この状態は続いてほしいですね。すみません、答えになってないかもしれません。

緒方: 政治の部分が薄くなっているというのは本当にそうだと思います。私が韓国の大学で教えていても、日本語の授業をやっている、でも、単純に語学だけ、言葉だけでできていても仕方ないという部分もあったりして、少し歴史的な日韓関係の部分の客観的な事実だけを述べようと思って少し触れたりすると、授業アンケートの中で韓国の学生が、自分は日本が好きでこの授業を取っているのに、そういった政治的なことに触れないでほしいというような学生が出てくる。だから、逆に若い世代はそういうものをむしろ避けてくると。よく脱歴史ということがいわれたりもするのですが、韓国社会でもそういうことを忌避するような、そういう空気が出てきているというのはあるのだらうと思います。

上からか下からかというお話があったと思いますが、私は両方だと思います。やはり政治がやるべき役割があるし、民間でも市民交流でやるべき役割が当然あって。今まではたぶん日韓関係というのは国だけ、政治だけ、上からだけだったと思います。ただ、それではもう立ち行かないというか、それだけでは限界がある時代になってきていると思います。韓流も非常に重要だと思っていて、入り口として韓国の実態を日本人たちが知るきっかけにもなっていると思うので、そこから発展していくようなところで、避けていては駄目なのではないかと思うし、一方で避けてばかりいなくてもよい時代になってきているのかなと。あるところではぶつかって、今のお話でもありましたけれども、けんかしても、その後、仲良くなれるくらいの緊密さというのは、日韓間でだいぶいろいろな経路ができてきているので、やはり避けるだけでは問題を先送りすることになると思うので、しかるべきところではきちっと議論するようなことはやった上で、今を維持した中でやっていくと。だから、話が通じないから終わりだといって、対話の経路を断ってしまうような、そ

うという関係というのは違うと思いますが、そうではないような形でやっていくというのはできると思います。

個人的なレベルでいくと、うちも妻が韓国出身なのですが、私の妻は韓国人だというと、韓国の女性はどうかとよく聞かれるのですが、別に韓国の女性全体と結婚したわけではないので、答えられるわけがないんです。ただ、そういう見方自体が変わっていく時代にもなっているし、変わっていかないといけないと思っているし、そういう意味では、結構、楽観的に、私は思っていて、これから可能性がいろいろとあるのではないかと。その一つとして韓流も重要なのではないかと考えています。

[質問5]：テーマとは少しずれてしまうかもしれませんが、お聞きしたいことがあって、ご質問させていただきます。今、私は韓国の軍事政権下で行われていた学校教育について、学校教育で軍事文化がどのように生産されたかというのを研究しています。一応、朝鮮戦争後から民主化までの教育を受けた人、例えば今の韓国をつくった人たちが受けた教育について研究していて、まさに伊東さんがいらっしゃった時代を生きた方々なので、今の60～70代くらいの方々にずっとインタビューをし続けています。当時の韓国政府がどのように軍事を使って、どのように国民をつくるのかというのをいろいろとインタビューを通して聞きたいのですが、本人たちは当たり前だと思っているので、そういう当たり前だと認識していることを聞き出すということが常に難しく、悩みがあるという状態ではあります。

一応、この研究自体が個人の語りをテーマにしているので、まず2000年代くらいまでは政治と強く関連しているからタブー視されてきたというか、あまり記録としても残されていないという研究だったので、私はそういう、記録もしたいということもあってやっています。こういう歴史、例えば学校で教練があったり、国民倫理があったり、そういうのは日本人も知らないことだけれども、韓国人の中でも若い人に教練があったらしいよと言ったら、何それ、知らないと言っている子も結構いて、韓国人の中でも歴史認識や理解にかなり違いが見られるというのは、世代間の違いを強く感じています。

質問は、先生が目にした日常的な軍事的な出来事等があったら教えていただきたいということと、軍事政権を生きた人々の、一概には言えないと思いますが、特徴や印象をやはり日本人からの、その当時を生きた人からの視点でぜひ教えていただきたいと思います。お願いします。

伊東：私がお話しできることはあまりないと思いますが、印象的だったのは、イ・ビョンホンという俳優さん、ご存じでしょうか。2004年ごろに私はイ・ビョンホンを特集した本をつくっていました。彼は『JSA』（2000年、パク・チャヌク監督）という映画に韓国兵役で出ているのですが、軍事境界線上にある共同警備区域（JSA）で北朝鮮の兵士と仲良くするという内容でした。映画の記者会見の時にイ・ビョンホンが、自分たちは子どもの時、北朝鮮の人間は角が生えている、鬼のようなやつだというふうに教わった。その自分が今、こうやって北朝鮮の兵士と仲良くする、そういう映画に出ているということがものすごい変化だと思った、というような話をしたのです。イ・ビョンホンは今、50歳ぐらいだと思いますが、彼らが小学生だった40年前ぐらい、1980年代はまだそういう教育だったんですね。

それともう一つ、その映画と同じ頃、金大中政権になってから、38度線や非武装地帯のほうに行く観光や教育を、「統一観光」「統一教育」という言い方をするようになった時期がありました。それは新鮮でした。昔は「安保教育」「安保観光」といっていましたから。今は何というのでしょうかね。

緒方：京畿（キョンギ）道が安保観光と言っていましたね。

伊東：安保観光とか言っていますか。北朝鮮が安全保障上の「第一の敵」だった時代から、同じ民族で「統

一のためのパートナー」となった時に、北朝鮮についての教育や軍事境界線を観光する目的が変わったことはすごく印象的でした。たぶんその時に学校の教育も、私は見ていませんが、教科書なども随分と変わったのではないかと思います。おそらく先生は研究の中で教科書などもご覧になっていますよね。こちらが教えてほしいくらいです。とても関心があります。

出水：90年代に釜山で3年間生活した時期は、地下に退避する訓練というのがまだ頻繁に行われている時期から、急速に行われなくなっていくという時期でした。釜山とソウルを結ぶ高速道路の途中には、明らかに滑走路に転換する目的を持った地区というのが、当時いくつか存在したのですが、私が90年代に勤務している間にそれが固定化される、つまり、もう使わないという前提に変更される工事が行われました。つまり、朝鮮戦争の時には釜山が臨時首都になるほど押し込まれたという歴史経験があって、それ故、釜山の北方に高速道路を利用して緊急時の出撃滑走路をつくるという前提で高速道路をつくっているのですが、90年代の中ごろにはそれを使う必要がないという前提に立ったからこそ、それを普通の高速道路に改修するという工事が急速に進むわけです。そして、退避訓練の頻度も下がっていきました。そういった意味では、やっぱり軍事的な、実際に力関係が逆転したが故に、たぶん教育の在り方やその扱い方のリアリティーがそもそも変わったのではないかという気がしますね。

伊東：もう一つ、韓国に『ハルベ（お爺さん）の誕生』（チェ・ヒョンスク著、2016年、イマジン）という本があります。韓国には「荒れ狂う老人たち問題」というのがあって、例えば運動団体のデモなどがあると、そのカウンターとして右翼系のおじいさんたちが出てきて、大暴れをするわけです。

在郷軍人会や戦友会、キリスト教右派などの所属はいろいろですが、その人たちがものすごく汚い言葉を使ったり、一時期はガスバーナーに火をつけて威嚇したりしていました。李明博大統領の時代ぐらいからでしょうか、非常に過激なデモが繰り返されました。

その人たちというのは、70歳代くらいから80歳以上もいます。自分たちがベトナム戦争で勇敢に戦ったことなど、過去の栄光はあるけれども、今はもう行き場がない。ところが、デモや集会に参加すれば、自分の話を聞いてもらえると。中にはYouTuberになって現場から発信する人たちもいます。

そのおじいさんたちがどうしてそうなったのか、荒れ狂う老人問題の根っこには「その人たちが受けた教育がある」ということを、『ハルベの誕生』の著者のチェ・ヒョンスクさんは言っています。「あの人たちは小さい頃から親にも教師にもボコボコに殴られて、そういった昔の軍隊式の教育の中で育った。だから人を暴力や暴言で押さえることしか思い付かない」と。彼らはその意味で「同情に値する気の毒な人間なのだと」いうことをおっしゃっていました。

出水：よろしいですかね。では、そろそろ予定していた時間になりますが、どうしてもという方が最後にあれば、手を挙げていただきたいなど。簡潔に。

[質問6]：先ほどのお話を聞きながら、90年代の自分の留学時代を考えたのですが、2012年から最悪の日韓関係だということでスライドにありましたし、そういうふうにいわれていますけれども、私の実体験から考えたら、96年に留学した時は私にとって最悪の日韓関係だったのです。竹島問題や慰安婦で毎日、何か言われていて。それに比べたら2018年の「NO JAPAN」などは、甘いという言い方はおかしいですけども、まだよいほうではないかと思います。先生が30年間、暮らされた中で、一番日韓関係が悪かったなと感じた時はいつですか。

伊東：日韓関係ではなくて、韓国での反日感情が一番悪かったというのは、やはり90年代のほうがきつかったですね。飲み屋なんかで、日本語で話していると何か飛んできたり。そういうストレートな反日感情があったので、その意味ではきつかったですね。先ほども言ったように、内容もでたらめで、日本の女はブスが多いという本が200万部も売れたりして、もういいかげんにしてほしいですね。だから、それに比べたら、先ほども言ったように、今は普通の感じになって、さらに、もう日本どころではないという感じで。

ただ、日韓関係というたとぶん政治や外交の話になってくるので、政治家にとって日韓関係はいつが一番悪いかと。先ほど言ったように、垂直な日韓関係でウハウハ言っていた時代が日本の政治家にとっては、最もよかったでしょうね。1960～70年代の日韓の外交関係は日本語ベースで、日本の政治家にとっては非常においしい、蜜月時代でしたよね。

私が最近、感じるのは、韓国の人たちは政治と自分たちの友情関係や、ビジネスなどを分けて考えられる。政治と個人を切り離すことが、習慣として身についている。だから、日本の歴史認識は許せないけど、日本人の君とは仲良くしたいという、それが自然にできている。でも、日本人のほうはそういうことが苦手です。だから、政治的な問題を避けて、それはやめておこうということで全部切ってしまう。

それは韓国に限らず、ほかの外国に対しても、恐らく政治的な問題になるとやめておこうとなってしまうのは、日本人の特徴なのかもしれません。いや、日本人に限らず、たぶんイギリス人もアメリカ人にもあるような気がします。植民地にされた側ではなくて、してきた側の国の人たちは、大体、みんなそういうことを言われると、「え…」となってしまうような。ただ、やはり大学まで出た人や、取りあえず韓国のことを専門とする人くらいは、いろいろと勉強されたほうがよいのではないかと私は思っています。歴史や政治外交的なことも含めてです。一般の韓流大好きの中高年に、今更、勉強しなさいとまでは言いませんが。

出水：われわれにブーメランが返ってくるような話題でもあるのではないかというか、日本語圏のマスメディアの報じ方というのは、極めて短期的な観点でしか解説は書かれなし、説明はされないということが、しばしばあると思います。

今日のここでのやりとりのように、20～30年のスパンで見ると、変わるべきは確実に変わっているわけですね。しかもしばしば私は問題提起として言うことが多いのですが、「日韓関係」という表現自体が一体、何の関係を指しているのかが、かつては自明であった。つまり、それは政府間関係だと。当然、外交関係であって、それしか日韓関係はないだろうと言い切れるような雰囲気すらあった時代から、今はそういうことは絶対に言えないわけですね。日韓の間の関係、交流のチャンネル、どこから見るのか。例えばソウルから見る関係、東京から見る関係と、福岡から見る関係、釜山から見る関係は全然違うのではないかということも含めて、日韓関係が政府間関係だと無条件に言える時代は終わった。そういった変化を含めて、中長期的に変わったことがどのように変わったのかということを研究者が社会に発信できていないという意味で、われわれも反省しないといけないかなと思うところですね。

そしたら、予定の時間を若干過ぎていますがそれでも、改めて非常に貴重な、リアルなというか、生々しいというか、人生に根ざしたお話で、私は非常にありがたかったと思っています。改めて伊東さんに感謝の拍手をして、今日の会を終わりたいと思います。(拍手)

伊東：どうもありがとうございました。